
雨音色

佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨音色

【著者名】

佳

【ZPDF】

Z2253D

【あらすじ】

時は大正時代。貧乏な大学助教授と、財閥の令嬢がひょんな事から見合いをすることに。

プロローグ

時は大正の中じる。

時には古きものに捕われ、また時には新たなものを追い求める、

混沌とした時代の話である。

「……何で……？何で……？」

聞こえるのは、降り続く雨音と、互いの声。

傘もささず、二人はそこにいた。

「……どうしてかな……。自分でもよく、分からない。

ただ、今行かなければ、駄目だと思ったんだ」

暗闇の中、うつすらと見えてるのは互いの顔。

いつもなら道を照らしてくれる月さえも、黒い雲で、その姿を隠す。

「そして、これだけは伝えたかった」

一步、彼が彼女へと歩み寄つた。

「・・・？」

暫く、彼らの間に沈黙が漂う。

雨は止む事を知らないかのように、佇む一人に、激しく打ちつける。

「・・・心が泣くんだ。君に会えないと」

雨が一層強くなつていぐ。

「・・・私も・・・」

彼女も、彼の方へと歩み寄つていぐ。

長い腕が、濡れた体を包み込んだ。

どれぐらい、この暖かさを望んでいたのか。

雨に混じって、その瞳から涙がこぼれる。

でも、それは今までのそれとは違つて、

悲しいものではなく。

「あいつと一緒にいる」

かすれた小さな声が、彼女の耳元にそそやかれた。

「・・・はい」

暖かい雨の音色が、一人の体を包んでいった。

第2話・違う世界。

「藤木君、今日の学会はどうだった」

立派な口ひげを指でなぞりながら、長身の初老の男性が、隣で歩くこれもまた長身で、

少し大きめの洋服に身を包んだ若い男性に話し掛けた。

「非常に有意義でした。

独逸の学者の方々と直接議論できるなんて、独逸留学から帰ってきて以来初めてですし」

若い男がそう言つと、彼は嬉しそうに何度もそのひげを触つた。

「最近刑法学者も増えてきたことだし、今後の頑張り次第だね」

「はい。頑張ります」

彼らがいたのは、帝国大学の講堂だった。

午前中からの白熱した刑法学会も、ようやく幕を閉じたところであつた。

彼らは外に出た。

そこには一台の車が待っていた。

「藤木君、今日は乗つて帰るかい？」

「お皿葉にせえで」

彼が軽く会釈をした。

「最近は車の数も増えてきたから、

あまり我々が乗つてもそう珍しがられることもなくなつたな」

男はそう笑うと、運転席の窓を叩いた。

うたた寝をしていた運転手は、慌てて外に出てきて後部座席のドアを開けた。

「いえいえ、僕の住む方では、まだまだです。

道端にランプがあるのは先生がいらっしゃる近辺ぐらいですよ」

「ははは。大日本帝国とか、デモクラシーといつても、東京だけなのかもしけんな」

彼らは車内に乗り込んだ。

黒光りする車体が、白い煙を立ててその場を去つていった。

「牧先生」

被つていた帽子を取り、大きく息を吸う。

肩から力が抜けていくのを、藤木は感じていた。

「何だ」

「明日、読んで頂きたい論文があるんです」

「ほう、何についての論文なんだ」

「こないだ父親が子供を使って窃盗をさせた事案があつたではないですか」

「ああ、そういうえば」

「あの事案における父親の正犯性について考えてみたんですが・・・

」

彼は、藤木をまじまじと見詰め、いつに言つた。

「・・・面白い。明日、持ってきてなさい」

彼はふと、窓の外を見た。

暗闇に光るランプの明かりが、ぼやけて見えた。

「藤木君、最近のお母様の体調は?」

「ああ、先生がくださった食材のおかげでしょ、最近調子が良いです」

彼には病弱の母親がいた。

父は昔、帝国大学の物理学の教授だったが、既に他界していた。

それ以来、母の体調は芳しくない傾向にあった。

その呼び声に、足早に歩く長い髪の女が振り向いた。

「お嬢様、お嬢様！」

「そりゃ、それは良い事だ。ぐれぐれも大事にな」
彼は何も言わず、ただ笑つて軽く頭を下げる。

正午のこの辺りは、駅が近い為、昼御飯を求める人で溢れていた。

「何? タマ」

「何? ではございません。また今日もあんな風にしては、お父様がまたお叱りになりますよ」

不満げな表情を浮かべて叱責する声に、女は満面の笑みで答えた。

「良いのよ。どうせ私は末っ子だし。お姉さま達は良い所に嫁がれてこらのだから」

タマと呼ばれたその女は、額に汗をこじませ小走りで彼女の隣に来る。

「そんなことはございません。幸花お嬢様にも良い日那様を・・・

「タマー!」

彼女は立ち止まつた。

タマは両肩を一瞬震わせた。

「お願い。お父様には私が説明するわ。だから、今はもう何も言わないで」

そう呟くと、彼女は再び歩き始めた。

その後をタマが息を切らせながら追いかける。

「しかしあ嬢様、やはり断ることしてもそれなりの方法が・・・」

タマは先ほどの光景を思い出した。

そして実感する。女が学と富を得ることの恐れじてやま。

「・・・やうね。今日せやうすがたわ」

幸花は大きなため息をついた。

家で落とされる雷の音が、今にも彼女の耳を劈くよつだった。

決して彼女の父の声は大きくなかった。

父が仕事から帰つてくるとすぐに、彼女は居間に呼ばれた。

「幸花」

今まで父親に怒鳴られたりしたことも、手を上げられたこともない。

穏やかな、しかしじこかにその威厳を感じさせ、そういう声だつた。

「じつして今回のお見合い相手は気に入らなかつた」

彼女は父の視線から目を逸らした。

「・・・相性が良くなさそうだと思いました」

父がくわえるパイプから、苦くて甘い香りがした。

「幸花、私は君を少し甘やかしすぎたかもしれん」

いつもは柔らかいソファも、その時ばかりは背の上に座つてこらえうだつた。

広い居間に、父親と一人だけでの向かい合わせのこの状況は、

最近では日常茶飯事になりかけている。

「強制はしない。しかし、幸花ももう一歳だ。その事は良く分かっているね?」

「はい・・・」

女学校時代の友人のほとんどは既に結婚していた。

中には子までも産んでいる者もいた。

「でも、お父様、私・・・」

「私も分かっている。しかし、いつまでもそつはいかないだろ?」

彼女は俯いた。

父はソファから立ち上がった。

「好きな絵も音楽も学も、結婚してからでも出来る。優先事項を間違えてはいけない」

父が窓の方に歩いていく。

その後姿は広く、大きかった。

「・・・はい」

「・・・自分の部屋に戻りなさい。私はこれから先方に詫びの電話を入れねばならない」

「(笑)めんなさい、お父様」

「もう良い。しかし、幸花、やはり断るにせぬ礼であつてはならぬ
い」

「はい。お休みなさい、お父様」

「・・・お休み」

「・・・でも、すつきつしたわ」

「申し訳ございません。しかし、お父様から遂一報告する事がないままにして」

彼女は振り向きもせずに言った。

「・・・タマ、言ったのね、お父様に」

自分の部屋までへの長い廊下を歩いていると、背後に気配を感じた。

彼女は今日、自分が言つた台詞と相手の顔を思い出しては、笑いそうになった。

「学者馬鹿との見合いはもう嫌よ。」

自分の専門分野のことばかり話して、つまんないんだからー。」

「しかし、『満州征服』に意外と時間がかかっていることについて話されたからといって、

『常識無しの空っぽ脳みそと話す』ことについては

それに匹敵するぐらいのかなりの時間と労力を費やす』と言つては駄目ですよ・・・」

「事実を言つたまどよ」

「山内家は学者だけなのですよ、親族にいないのは

山内家は当時、日本でも有数の財閥であつた。

彼女の2人の姉は、他の財閥や政治家の家に嫁いでいた。

「だから、日本の有能な学者様とお嬢様が結婚なされば、山内家は・
・」

「タマ」

彼女は真剣な眼差しでタマを見つめた。

「お姉様達みたいな生活は、本当に幸せなの?」

「・・・ええ。やつじょがこます

タマは答えた。『少なくとも、私たちよりは』といふ言葉を付さないで。

「・・・」

幸花は何も言わず、自分の部屋へ向かっていった。

第3話・きっかけ。

「おはようございます」

広大な敷地の真ん中にある洋風な建物の一室に、彼らはいた。

「おはよう。 藤木君」

彼は両手に向冊もの厚い本を抱えていた。

「先生、申し訳ありませんが、独逸語の辞書を貸していただいても宜しいですか？」

「おや、今日は授業がある日だっけ？」

「ええ。午前中に独逸刑法の授業で、午後は判例刑法研究のセミナーです」

「そりゃ。頑張りたまえ」

牧は藤木の肩を軽く叩いた。

「藤木君、君の授業は帝国大の中で非常に分り易いと評判みたいだよ」

牧は片目を瞑つて笑い、彼の両腕に抱えられた本の山の上に、もう一冊のそれを重ねた。

「あはは。牧先生にはまだまだかないません」

積み重なった書物の重さによろめきながら、自分の学生時代をふと思出した。

突然の父の死で大学中退を余儀なくされていた時、

牧先生が教授達に頼んで自分を学校に残してくれた事。

いくら父の友人だったといえども、自分の為に頭を下げてくれたこの人を、

彼は「くした父同様、尊敬し慕っていた。

「先生」

「どうした?」

独逸土産に買つてきた陶器のカップに、紅茶を注いでいる後姿に声をかけた。

「……あの時、どうして僕を助けてくれたんですか？」

しばらくしての沈黙の後、牧が微笑んだ。

「やつしなければならない、そう思つたからだよ」

腕に軽やかな重みを感じて、彼は呟いた。

「先生らしいですね」

牧は何も言わず、紅茶をお茶菓子と共に、自分の机に運んだ。

彼は貰しかつた。

彼のゆつたりとした人柄故か、彼の評判はかなりのものだった。

そのため、時には陰口を、特にエリート層から叩かれる事もあった
が、

28歳の若さで既に講堂の過半数を埋める事はそうそうあることでは無い。

帝国大学での独逸刑法の授業は、学生の間ではその分かり易さで好評を得ていた。

着る物も普段は人からもらつたものや、父が昔着ていた古い着物だつた。

黒い髪も長くぼさぼさで、眼鏡も最近では度が合わなくなつてきていたが、

それを変える生活の余裕はなかつた。

やつと助教授になれ、病弱な母親の薬代で生活費が消費される中、

余計なものは買えるはずがない。

父が亡くなつてから、彼の生活は一変した。

住む場所も、生活水準も、全てが下降した。

大学も本来であれば退学となるはずだった。

しかし、ゼミナールの担当教官であり、父親と友人であつた牧教授が、

彼を生活面等で援助し、卒業させてくれた。

果ては大学に残るよう、「と自分の助手になる」とまでを勧めてくれた。

そして現在、彼はここで授業を行ながり、刑法についての研究を行っている。

帝国大学といふHコートの集まりの中では貴重な経験をしている彼は、

周囲の者よりもHコートに親しみやすいものがある。

それが一つの好評の要素なのだろう、そう牧は考えていた。

「失礼します、先生」

「・・・ええ・・・え？・・・はあ、しかし・・・。

うーん、そうですねえ・・・それでは一応聞いてはみますが、あまり・・・。

はい、はい・・・分かりました。それでは

藤木が牧の研究室に入ると、牧は電話で誰かと話している最中だった。

彼が自分の研究室に戻ってきた時には、既に太陽は西の地平線にその姿を隠そうとしていた。

議論が長引いて、授業の終了時間を延ばしてしまったのである。

「おつかれさん」

受話器を置いた後、牧は笑つて藤木を労つた。

牧は自分の机にある椅子に腰掛ける。

「議論が長引いて、つい遅くなつてしましました」

そういつて、彼は朝借りた辞書を、彼の机の上に置いた。

「ありがとうございます、先生」

「ああ、良いよ。別に……」

そう牧は呟くと、彼はじつと藤木の顔を覗き込んだ。

「……？何か僕の顔に付いてます？」

「いや、やうじやないのだが……。藤木君、君は今年でいくつだ

「え……28歳になりましたが……」

奇妙なことを聞く、藤木はそう思った。

「28歳か……まあ、妥当であろう？」

彼は怪訝な顔で牧を見た。

「どうかされたんですか？」

「藤木君、君、見合いをするつもりはないか？」

しばしの沈黙が流れる。

「……はい？」

彼は目を見開いた。

「実は先ほどの電話でだね、若い独身の助教授がいないかと聞かれて。

見合いの相手を探してくれよう頼まれたんだ」

突然の話に、彼はまだ何を言われているのかさっぱり理解できてい
ないようだった。

「でも、それは別に僕じゃなくても・・・」

「まあ、君ももう28歳なら適齢だ。いつまでも独り身でいるわけ
にもいかないだろう」

「いや、しかし・・・」

牧は笑つた。

余程、藤木の狼狽加減が可笑しかったのだろう。

「別に見合いしたからといって結婚が強制されるわけではない。

軽い気持ちで相手のお嬢さんに会つてみたらどうだ。

それに相手は財閥の娘だ。申し分もない」

牧は立ち上がり電話のある所に向かう。

「やつは言つても先生、先生もご存知でしょ。僕には病弱な母がいます。

それに研究をしたいので結婚は・・・

「いや、お母様は君に早く結婚してほしこと想つてこの

「え、そ、そなんですか?」

「そうだ。きっとそうだ

牧が満足そうに微笑む。

「でも、先生、僕、お嬢様とか、そういう方は・・・身分の方も・

・・・

牧は相手の名前が書かれたメモを手に取る。

「やつと決まつたら早速電話じよ。」

「せ、先生、そんな」

「良いじゃないか。ちなみに相手は山内財閥の末娘だ」

牧が片手をさし、と瞑る。

「いえ、そういう問題じゃなくて・・・」

「まあ、人生経験として、な」

言ひや否や、牧は既に受話器を耳に当てていた。

「あ、もしもし牧です。先ほどの件ですが・・・」

藤木は後ろで発する言葉を失っていた。

第4話・期待はずれ。

「帝国大の助教授をなさつていてる方だ。

刑法を専攻されているらしい。

性格は温厚で、裕福且つ家柄も良いそうだ。

お父様はお亡くなりになられていのそつだが、同じく教授でいらっしゃつたらしい」

「・・・」

「来週の日曜日、大帝国ホテルで11時に待ち合わせになつていてる

「・・・」

大きな咳が部屋中に響いた。

彼が続ける。

「それに、今回は私が一緒に行く」

それまで黙っていた彼女が、突如声をあげた。

「ええーお父様。それは・・・」

「今までお前の望み通りにしてきたが、今回は私が一緒にに行くことにした。」

タマには家で留守番をしてもらひう

「・・・」

彼女は再び押し黙った。

「お母様も心配していらっしゃるだらう」

「・・・お母様・・・」

彼女は父の書斎に呼び出されていた。

予想通りの話しだはあつたが、父親同伴までは考へていなかつた。

それまでは父が同伴せざ、タマが一緒に「行く」とを条件にお見合いをしてきた。

むりさ、全ての見合いを断るため。」

彼女はちらつと父の机の上に飾られていた写真を見た。

西洋のドレスに身を包んで微笑んでいる、自分とそっくりの女性。

母の由希子であった。

5年前、既に病のため他界していた。

「私はお前を甘やかしました。

幸花が同伴しないで欲しいこと嘗つからせる通りにしてきたが、その結果がこれだ」

父が書斎の端に置かれている箱を指差す。

そこにはこれまでの見合いの申込状や写真が無造作に詰められていた。

「しかし、お父様・・・」

彼女は大きな瞳を父に向ける。

「無理強いはしない。だが、良い加減に真剣に将来を考えなさい」

そつ吐き捨てるごと、彼はおもむろに机の上の書類を取り出した。

「これから仕事がある。下がりなさい」

これ以上何も言ひつな、という父からの命令だった。

「はい・・・」

彼女は書斎を後にするしか為す術は無かつた。

「失礼します。お嬢様・・・」

「・・・」

真っ暗の部屋に、女中のタマが部屋に入ってきた。

「お嬢様、お着替え、ここに置いておきますよ

ベッドの上に横たわる彼女の傍に、タマは着替えのネグリジェを置いた。

「・・・ねえ、タマ

か細い声が響く。

「・・・はー」

タマに向かって臂を向けたまま、幸花は呟いた。

「タマは結婚して何年になりますかね？」

「かれこれ、25年くらいですかね？」

タマは指で数えるべく見せた。

「・・・結婚ついで、楽しこっ」

えへん、と一つ咳払いをした。

「ええ。お嬢様が思つてこひつむやつむ、すつと

タマはベッドの傍に跪いた。

まだあどけなさが残る横顔に、彼女は右手を添える。

幸花はそこにそっと自分の手を重ねた。

「お姉さま達を見ると、結婚なんかしたくないわ」

大きなため息が、行き場もなくその場を彷徨う。

「好きでもない人と生活して、毎晩知らない人と社交パーティーして、

それぞれ別に恋人がいて、そんな結婚は意味があるの？」

タマは黙っていた。

ただ優しく彼女の髪を撫でるだけだった。

「お父様は、御自分はお母様と一緒になれて良かつたかもしけないけど、

「どうして私達をつまらない人達と結婚させよつとするのかしら」

誰の目から見ても、父と母は愛し合っていた。

未だに父が他の女性との結婚を勧められても断り続けるのは、

母が忘れられないからなのであらう。

「子が親の幸せを願うのは当然ですよ」

「だつたら・・・」

タマは幸花の口の前に人差し指を置く。

「結婚で幸せになれるかはお嬢様次第ですよ。」

「ああ、もう遅いですからお休みください」

「私次第・・・」

彼女は掛け布団を掛け直した。

「お休みなさい、お嬢様」

「・・・お休みなさい」

外では、緑の風が優しく吹いていた。

第5話・出発

朝7時半、太陽が東の空に昇り始めた頃、

周囲の状況からあまりに浮いている車のエンジン音とともに、

布団にぐるまつていた藤木は聞きなれた声で起された。

「ひれ、起きあいー。」れからお前を変身せしむ

言われるや否や、かけ布団を剥がされた上、返事も待たれずこ、

彼は何人かに引っ張られ、髪の毛をいじられた挙句、

「早く着替えろー。」

と寝ぼけまなこの彼に洋装が投げられた。

彼は命じられたままそれを着用し、それを着終わったころ、

ようやく自分の置かれている状況を把握した。

「ああ、今日はお見合いで牧先生が洋装を持つてくるんだっけ・・・」

「

そう思つたのも束の間、彼はそのまま車の中に連れ込まれていった。

否、押し込まれたという言葉のほうが的確かもしれない。

「こつてらつしゃい」という母の声が聞こえたような気がした。

「大帝国ホテルまで急いでくれ。ここからでは時間がかかるからな

「かしきまつました」

彼らを乗せて、黒光りするそれは走り出した。

「お任せください。いつもより綺麗にして差し上げますよ。

タマはこりこり笑つていった。

薄い桃色の洋服に身を包んだ彼女は、普段よりも美しかった。

「ええ、この洋装に似合つんしてね

タマは鏡台の前に座る幸花の長い髪を持ち上げて言った。

「お嬢様、今日は洋装で行かれるのですか

「今日の見合いで成功させられますよ！」

鏡に映るタマの笑顔に、彼女も微笑み返した。

その表情のどこかに、心の奥に隠した感情が潜んでいるのを、タマは知る由もなかつた。

「いいか、無礼のないよつにな」

「はあ・・・」

「ぼりぼり、と乾いた音がした。

「そういう風に相手の前で頭を搔いたりするな。

背筋を伸ばして。

ほひ、眼鏡もこれに代えなさい。

それでは汚すまい

助手席に座る牧から、新しい眼鏡が手渡された。

「先生、見合ひって言つても・・・」

「とにかく、きちんとしなさい。分かったかね

「・・・はあ・・・」

「壮介君、いつもより素敵に見えるから、頑張ってね

そう言つたのは、隣に座る牧の妻である晃子であった。

子供のいない二人は、藤木を実の息子のように可愛がってくれていた。

今日は藤木の見合いといふこともあり、二人揃つて出向いてくれたのだつた。

「・・・はい」

唯一憂鬱な顔をした藤木は、窓の外を見た。

久しぶりの銀座は、多くの人で賑わっている。

「・・・はあ」

大きなため息が、彼の口から零れ落ちた。

「藤木様でいらっしゃいますね。

山内様はもうお見えになつておられます。

リストランテ・ブルーHの方にご案内致します

ロビーのカウンターの煌びやかさに、藤木は目を躍らせた。

ビルの方向を向いても全てが輝いて見えた。

「ありがとうございます。ほれ、藤木君、いくぞ」

牧が持っていたステッキで軽く音を立てた。

彼は光の洪水に若干の眩眩を感じながらも、急ぎ足で彼の後を追つた。

「うーん、そんな顔をするのでない

「はー・・・」

明らかに不機嫌そうな表情の幸花を、父が嗜める。

「いいか、粗相のなによつこなさい」

「・・・はい」

幸花は膝の上の両手を固く握り締めた。

「失礼します。山内様。藤木様」一行がお見えでござります

そこにはレストランの傍にある個室だった。

給仕の者が、ドアの向こうから彼らの到着を告げる。

「ありがとうございます。お通じして」

「承知いたしました」

しばらくして、ドアをノックする音が聞こえた。

「幸花、立ちなさい。くれぐれも無礼のないよつ

聞こえないぐらいの小さな声で彼がつぶやくと、ドアの方に向かい、扉を開けた。

「よつじやこりゅしゃこました。

牧殿でいらっしゃいますね。山内でいらっしゃます

牧は深々と頭を下げた。

「初めてお目にかかります、山内殿。よろしくお願ひします

「それで、そちらの殿方が・・・」

軽く背を押されて、一人の若い男性が入ってきた。

彼女はそちらの方を一瞥した。

その瞬間、彼女は自分の心臓が飛び跳ねた感覚を覚えた。

長身で涼しい田元。

優しそうな口元。

今までの、『学者』の見合い相手とは『多少』異なっている・・・
よつた気がしたからだつた。

「藤木壮介と申します。牧先生に師事しておりまして、現在助教授
をしております」

『助教授』

何度聞いたか分からない肩書きであった。

やはり今回も一緒か・・・。

彼女は自分のつま先を眺める。

先程のそれは、やはり気のせいのようだつたらしい。

「よろしくお願ひします。藤木先生。幸花、自己紹介をなさい」

ぽん、と肩を軽く叩かれた。

我に帰つた幸花は、一步前に進む。

「山内幸花と申します」

「藤木壮介です。よろしくお願ひします」

二人は揃つて頭を下げた。

「それでは腰をお掛けになつてください」

幸花の父、英雄が言つ。

それと同時に、がらがら、と給仕の者が料理を運びこんで来た。

第6話・満腹の原因

「それで藤木君、独逸ではじこにいたんだね」

父の英雄が、ワインを片手に上機嫌な声を上げる。

「ベルリンにいました。長期ではなかつたのですが、

色々な事を研究させていただいて、本当に充実した留学生活でした」

料理はメインディッシュの肉料理を終え、

そろそろザートである果物が運ばれて来る頃だつた。

英雄はグラスに残つたワインを一気に口に流し込んだ。

「そうかそうか。私は英吉利の倫敦に行つた事があるが、そこも中々だったよ」

父の満面の笑顔に、彼女は吐き気に似たようなものを催した。

「本ですか？僕もいつか機会があれば訪問してみたいと思つてい

ます「

「ああ。是非そうしたまえ」

幸花は一人の様子を恨めしそうに眺めていた。

ワインを一気に飲み干す仕草。

それが父の機嫌が良い時の癖であることを、彼女は知っていた。

「しかしある娘様は、とても大人しい方なのですね。

先ほどからあまりお話しされていないのでは？」

突然、牧が幸花の方を見ながらそう切り出した。

彼女は咄嗟にうつむく。

父が隣で笑った。

「幸花は少し人見知りで・・・。初対面の方と会うと緊張してしま

ପ୍ରକାଶକ

「そうですか。いや、近年は職業婦人なる方も出てきて活発な方も
多いが、

やはりお嬢様みたいな大人しい女性は理想的とも言えるでしょう

思わず叫びたくなる。

歯が浮いてしまった。その歯は、もう聞き飽きていた。

「デザートが運ばれてきた。」

フルーツの切り身が、美しく盛り合されている。

「それでは、これを食べたら少し一人きりでお話しなさつではどうですかね」

牧が幸花の方を見た。

「そうですね、一人とも我々がいるのでは話しあいにくいようですし」

政治の話、経済の話、法律の話を一通り終わった後である。

一人きりになつた後の会話を思つと、身震いがした。

とうとう始まる。

学者特有の自分の専攻についての話しが。

幸花は横に座る父の横顔を盗み見た。

明らかに満足そうな表情が伺える。

口から出でしおになつた溜息を止めるのに、彼女は必死だった。

「確かに西洋の庭園があるやうですよ。そこでお話ししてきなさい」

「「はい」」

右手にフォークを持ち、口に運び入れる物を選ぶ。

どれも同じようで、どれも選びたくなかつた。

左手にナイフを持ち上げ、仕方なくメロンを切る。

溜息だけが、彼女の空腹を満たしていた。

第7話・意外な返答

「・・・あの・・・」

そこは、静けさが漂う閑静な庭園だった。

川のせせらぎが、涼しげに響く。

二人は川の上に掛けられた橋の上を歩いていた。

「・・・はい?」

彼女は立ち止まることなく歩き続ける。

「・・・あ、いえ・・・」

思わず彼は口ごもった。

「・・・」

再度の沈黙が切って落とされる。

「あの・・・」

「何ですか?」

「・・・いや・・・」

二人の間だけ、気まずい雰囲気が漂つ。

彼女はそのまま先に進んでいった。

「到着してから既に30分が過ぎている。

庭園に来てから、一人の間にあるのは、呼びかけだけの繰り返し。

幸花は足早に藤木の前を歩く。

藤木は彼女の数歩後ろを追いかけるかのように歩いていた。

まるで鬼ごっこをしているかのようだ。

幸花は藤木の方を見よつともしない。

それもそのはず。

彼女の心は、部屋を出たときこじた一つの決心で占められていた。

『必ず相手方から断らせる』

父が気に入ってしまった以上、残された手段はそれしかない。

彼女は頭の中でその言葉を先ほどから呪文のように何度も繰り返し唱えていた。

そして彼が話し掛けてくる度に相手を睨み、

語尾を強くする、

しかし暴言は吐かない・・・出来る限り。

これが彼女の戦略だった。

「あの・・・山内さん」

それは何度もになるかも分からなくなるほど呼びかけだった。

彼女のいづつきは既にピークを超えていた。

「・・・何なのですか、さつきから。

言いたいことがあればさつさと仰つたらいかがですか？

殿方であればはつきりと物怖じせずに物を言つのが通でしょ。ま
つたく・・・」

彼女は初めて彼の方を振り向き、強く睨み付けた。

彼が困ったように自分の頭を搔く。

「すみません」

彼が頭を下げる。

その態度に、彼女の怒りは益々湧き上がる。

「そういう意氣地の無い殿方では先が思い遣られますわ。

そもそも、貴方様は大学の助教授でいらっしゃるのでしあう？

だつたらはつきつ言つべき事を言つのが当然でしあう？」

彼が呆氣にとられたような顔をした。

「申し訳ありません。

それでは、先ほどから気になっていたことをお尋ねしますが・・・

彼が一呼吸置く。

「お見合いで、嫌でなれどするのよじょひへ。」

「は・・・」

肩の力が一気に抜けていく。

今度は彼女が呆氣にとられてしまつ番だった。

まさかここまで直球に尋ねられるとは予想しておらず、多少面食らつてしまつたのである。

彼女はこれまでの見合いで経験上　それも助教授ばかりだったので

上の話題は自己の研究課題と海外留学のことだけだと思っていたからだ。

「無理なさいないでください。正直なことを言つてください構いませんよ」

「・・・」

そのままでも言われてしまつと、本当の事が言えなくなつてしまつ。

彼をまじまじと見つめた。

「・・・父にそう言われたのですか？」

彼女が怪訝そうに尋ねた。

「いえいえ。貴女様の様子からすれば明らかですよ」

彼が朗らかに答えた。

食事中、彼女は一度も彼の方を見向きもしなかつた。

一言も発することなく。

一心相手は学者。

それだけすれば気が付くに決まっている・・・。

彼女は恥ずかしさで自分の頭に血が上つていいくのを感じていた。

「実を言えば、僕もです」

「・・・はい?」

予想だにもしていない発言。

「今日のお見合い、僕も突然入れられて、訳も分からず」
「」に連れ
られて来て

今貴方と此処で散歩するに至つてはいる次第です」

彼がにっこり笑う。

「・・・そう・・・でいらっしゃるのですか」

突然の彼の話に、彼女は戸惑っていた。

今まで全ての相手が、自分の家の名譽と財産欲しさに

見合いを申し入れているのかと思つていた。

いや、正確に言えば、

彼が初めて、そのような目的を持たない相手だった。

「ええ。だからお互い、普通に会話して、この時間を乗り切りまし
よう」

立ちすくむ彼女の隣に、彼が隣に来た。

その時、彼女の心が一瞬震えた。

「あ、そうだ、クロード・モネといつ[画家を]存知ですか？」

「え？ええ、まあ・・・」

突然の話題の変更に、彼女はまた驚かされた。

「私達が今立っているこの橋、似てませんか？」

彼の作品の・・・えっと、何でしたっけ、作品名

「・・・睡蓮・・・ですか？」（＊）

「そう、それです。僕、去年まで歐州にいた時、見る機会があつたのですが、

とても素敵でした。それで、そう、それを思い出したんです」

「・・・」

「僕、あまり絵心無いんですよ。」

何てつたって、学生時代、僕の美術の成績は『丙』でした。

でも、あの人の絵には感動しました。

何と言つか、あの柔らかな光の描き方、といつか、西洋画独特の・・・

・

優しく笑う彼に、思わず彼女は見入ってしまった。

「あれ？ 僕何か変な事言いました？ すみません。

僕、普段は男ばかりの生活で、あまり『婦人の方々と話し慣れておらず・・・。

『無礼をお許しください』

男が深々と頭を下げる。

「いえ・・・。あの、私、モネが好きなんです」

内心では、彼女はかなりの動搖を覚えていた。

彼は、少なくとも今まで見合いをしてきた男性の中では、初めての例である。

仕事の話をしない。

正直に物を言ひ。

そして謙虚な姿勢。

これまでの男性の中には、自分の専門分野しか話せないつまらない男や、

普段から遊女と一緒にいるのだろう、明らかに女性の扱いが慣れている、

挙句の果てには傲慢、といったそのどちらかだった。

学者馬鹿と不潔且つ傲慢な男の識別は、既に彼女の得意技となっている。

しかし、彼はそのどちらにも属さなかった。

「そうですか。それでは、美術に興味がおありなんですね」

「・・・ええ、女学校時代は美術の成績は『甲』でした。特に西洋美術は

男は嬉しそうな声を上げた。

「本当ですか？凄いなあ・・・。僕には無い才能をお持ちなんですね。

あ、それではもしかして、西洋音楽には興味ありますか？」

「ピアノとバイオリンは習つてあります・・・」

「それでは、『ジャズ』というのは、ご存知ですか？」

「え？ ジャ・・・」

「ジャズです。

僕が独逸にいた時、一緒に留学していた亞米利加人の友人が教えてくれました。

サックスという・・・うーん、大きな笛、とでも言いましょうか、

そのような楽器とか、ピアノとかも使つんです。

黒人音楽なのだそうですが、クラシックとはまた違つて何といふか・
・。

ああ、じつに芸術的な表現力があれば良いんですけど

彼は恥ずかしそうに頭を搔いた。

その仕草があまりに子供っぽく、彼女は思わず噴出してしまった。

「え・・・。あ、じめんなさい。また何か僕・・・。

あ、牧先生に頭を搔くのは止めると言われているのに、またやつてしまつた・・・」

彼が恥ずかしそうに自分の頭を搔く。

「いえ。面白い方だと思いました。・・・ねえ、藤木さん」

「はい」

一回胸に息を溜め、言葉と同時に口を開け出す。

「専攻は刑法でいらっしゃいましたよね」

「ええ。独逸刑法が中心ですが」

「刑法の研究についてはお詫なそりないの?」

「え、興味がおありのですか?」

彼が意外だ、と言わんばかりに田を丸くした。

「いえ、ただ・・・」

彼女はますますたじろいた。

いつもには無いパターンである。

今までとは違う吹っかけた瞬間に、田を輝かせるのが通例だった。

「聞きたくないでしょう。興味が無い話なんて」

「・・・」

彼が声をあげて笑う。

「僕も経験があるんです。

興味の無い講義を取らされて、危うく『不可』になる所でした。

特に刑法は物騒ですから、女性は好まないかと。

あれ、もしかして興味がおありで?」

「いえ、そういう訳では・・・」

彼女は考えた。

彼を形容する言葉を、『多少』から修正する必要がある、と。

『大分』彼は今までの見合い相手とは異なる、といつ言葉が相応しいようだ。

「あの・・・藤木さん」

彼女は俯き加減で言った。

「はい」

「宜しければ、その・・・ジャズ・・・でしたつけ?」

「ええ」

えへん、と軽く彼女が咳払いをした。

「聞いてみたいですね、そのジャズといつ音楽を

「もちろん。友人からレコードと蓄音機を貰つたので、機会があれば是非

彼が微笑んだ。彼女もそれにつられて微笑み返した。

注*

『睡蓮』について。

フランスの画家クロード・モネ（1840年11月14日 - 1926年12月5日）の代表作。

本作品中の『睡蓮』は『睡蓮、緑のハーモニー』（1899年）を意味します。

第8話・展開

「お嬢様」

部屋で髪をとかしていると、タマが部屋に入ってきた。

「何?」

鏡台に映るタマが、彼女を見て微笑んでいた。

「お嬢様が鼻歌を歌つてらつしゃるのよ、久しぶりでござりますね」

両手にベッドシーツを抱え、口を締めてタマが叫ぶ。

「やうだつたかしら」

出鱈田な旋律に乗せたその歌を、彼女は恥じることなく歌い続ける。

長い髪を一寧にブリシでとく。

丁寧に、丁寧に。

「・・・好青年だったそうですね。今日の方は

ベッドの上に真っ白なシーツが勢い良く広がった。

髪を梳く手が、一瞬止まる。

「・・・お父様がそう仰っていらしただけでしょ」

幸花がブラシを鏡の前に置いた。

長い髪を二三つ編みに編んでいく。

「お嬢様。恋は女を綺麗にしますよ」

幸花は勢い良く彼女のほうを向いた。

心なしか、その頬が赤く見える。

「タマーそういう事じゃないわよ。私はただ・・・

「はいはい。早くお休みになられてくださいな

レースが施された寝巻きが、床の上をかする。

「・・・タマ」

「はい？」

二人がベッドの上に腰掛けた。

「・・・お父様に伝えといて。幸花はまたお会いしたいと言つてい
たつて」

「はい。承知いたしました」

タマは吹き出すのをじらえるのに必死だつた。

「誤解しないで。

ただ、面白い方だからまたお話しを聞きたいだけ。

助教授だからお話もお上手なの。

それに私の好きな画家も知つてらっしゃったし。

新しい西洋音楽についても勉強したいし・・・

幸花が早口で話しあす。

いつになく雄弁な彼女を、タマが落ち着かせる。

「はいはい。今度お会いになる時も、タマが綺麗にして差し上げますよ」

「・・・ありがとう・・・」

溜息にも似た呟きが、彼女の口から零れ落ちる。

「もうお休みなさいませ」

タマが立ち上がった。

「お休みなさい」

薄いブランケットを幸花の上に掛けた。

彼女が皿を開ける。

氣のせいか、その口端はいつもより少し上にあがっていた。

「おまよひ、おまよひます・・・」

頭はぼさぼさ、古びた和服姿で現れたのは、藤木であった。

着用しているのは、ひびの入つたいつも眼鏡だった。

「おひ。おまよひー。」

そんな彼をいつもよりも明るい笑顔で迎えるのは牧であった。

「・・・何で今日はそんなに機嫌が良いのですか

頭を搔きながら、欠伸をする藤木の背を勢い良く牧が叩く。

「痛いですよ、先生」

「何を言ひ。私はずっと心配していたんだ」

彼が藤木の肩に手を回す。

「お前みたいな、優しいけど」か頼り無さそうで抜けている感じのする男は

女に好かれないとどうか？」

「……どうしてですか？」

妙な胸騒ぎがした。

「来週の日曜日、幸花お嬢様がお前に会いに来たいとおっしゃってるらしいへ、

女の方から都合は付くかと電話があつてな。もちろん大丈夫と答えておいた」

「……はい？」

再びその背をぽん、と軽やかに叩く。

「いや、実は彼女、かなり難しい性格だと他の見合いした助教授が言つていたが、

君はどうも好かれたみたいだ」

ははは、と明るい笑い声が研究室に響き渡る。

「・・・ちよつと待つてください。僕はまだ・・・」

藤木が口を尖らせる。

「良いじゃないか、女性とは付き合つたこと無いのだひつ。

女と遊ぶこともしないで勉強ばかりしてては、つまらん人生になつてしまひ。

女と酒は人生の必需品なのだから

「・・・」

適当な反論ができるず、ただ黙つて居るしかなかつた。

牧の言つ事は図星だつた。

勉学に明け暮れた学生生活、女性との交流は実の母と嫁いだ姉ぐらいであった。

「お前も彼女は嫌いではあるまい。

君はああこつお嬢さん、元氣で芯の強そうな女性が好きなのだろう。

私は無論お断りだがな。

気軽にお茶でも飲んで街を歩けば良い。

嫌なら断れば済む話だ

「何故元氣で芯が強いとお分かりなのですか？」

妙なことを聞く、といわんばかりの表情で牧が答える。

「財閥のお嬢様で、あんなに端麗な容姿であるにも関わらず、今回の見合いが初めてではないと聞いてくる。

それに見合いの席ではずっと膨れつ面。

一言も喋らうとはしない。

きっと今まであんな調子だったのだろう。

それに帰つて来た時、彼女の靴は土で汚れていた。

よほど一人で歩いたに違いない。

普通お嬢様は靴が汚れるほど歩くことはない。

体力が無いからな。

しかし、彼女はそれほどまでに歩けるほどの体力がある。

以上の要素からかかる結論を導き出せないのであれば刑法学者失格だ。

加えて、君のお母様も嫁がれた御姉様も、同じような性格をしているからね

彼の顔が仄かに赤くなる。

病氣になる前の母も、嫁いでいった彼の姉も、

女性にしては珍しく、したたかであった。

それに比べて、父は溫和で、怒鳴つたりしたことはなかった。

事実、彼女から叱られた時、彼は一瞬懐かしい気持ちになった。

幼い頃、

母からよく「堂々と物を言えるよう」「元気」と怒られた事を思い出したのだった。

それ故なのか、どうも良家のおじとやかなお嬢様には苦手意識があった。

一度だけ、父親が存命の頃、

親戚の勧めで他大学の教授の娘と見合いをしたことがある。

しかし、足が痺れた事しか記憶に残っていない。

それ以来、見合いの申し出は全て断つてきた。

彼女に会いたくない、と言えば嘘になる。

正直に言えば、会った瞬間、その美しさに目を奪われた。

あのはつきりした性格も、嫌ではない。

むしろ、いわゆる『好み』の婦人なかもしれない。

しかし、『結婚』という文字は、未だ彼には遠く感じられた。

それを語るには、未だ早過ぎる気がしてならない。

牧が自分の机に戻った。

彼は昨日借りた洋服を牧の机のそばにあるコード掛けの所に置く。

「先生、昨日の服、ここに置いときます」

「いや、それは返さなくて良い。また会う時にそれを着用しなさい」

彼は笑った。

藤木は自分のこめかみが少し痙攣しているのを感じるのであった。

「おひと、もつゝさな時間だ」

壁に掛けられた振り子時計が、莊厳な音を鳴り響かせる。

「先日の大審院の判例について、

講義してくれるよう頼まれてあるからの。行くぞ、藤木君」（＊）

牧が帽子を被り、片腕に数冊の本を抱える。

残りの大量の本を、藤木が抱え込む。

その足取りは、いつものそれより軽く、まるで踊りのステップを踏んでいるようだった。

藤木は小さく溜息をつきながら、その後に付いて行くしかなかつた。

*注

大審院

現在の最高裁判所の前身。

1875年（明治8年）に設置され、
1947年裁判所構成法の廢止に伴い廃止。

第9話・Knowing each other

「おはよー。四さん」

朝の8時30分。

いつもなら未だ布団の中で夢を見ている時間である。

日曜は毎まで眠るのが彼の趣味であり、楽しみであった。

「おはよー。早く『』飯を食べてしまいなさい」

ちやぶ台の上には湯気を立てた味噌汁といい飯、その隣には少量の漬物が置かれていた。

「はあー・・・」

寝ぼけまなこの彼は、欠伸をしながら正座をする。

「今日お嬢様に会つんでしょう?髪もきちんと整えて行きなさいね」

母が心配そうな様子で彼に言つ。

彼は味噌汁をすすりながら頷く。

「前回は牧先生が一緒にいたから良かつたけど、心配で仕方ないわ。

くれぐれも迷惑をかけてはなりませんよ」

彼は黙つたまま漬物を白米の上に乗せ、それをかきこむ。

「分かった？」壮介

「ふあい

最後の米粒と味噌汁を同時に飲み込み、彼は茶碗を持って立ち上がつた。

「片付けは良いから、早く着替えてらっしゃい。

待ち合せに遅れたら、それこそ大変だわ

彼は苦笑いをしながら、茶碗を流しの所に置き、洗面所へ向かった。

「・・・すみません・・・。遅れてしまつて・・・」

門の前には、一台の車に白い洋服姿の女性と和服の女性が立っていた。

和服の女性が彼を凝視する。

講堂の壁に掲げられた時計は、

待ち合わせ時間である11時から既に30分を過ぎた所を指していた。

「いいえ。今来た所ですよ」

幸花がこくり笑った。

「本当に申し訳ありません。色々ありまして、つい・・・」

息を切らしながら、彼が深々と頭を下げる。

彼女の隣に立っている、中年の女性があからさまに機嫌を損ねているのが分かる。

「・・・お嬢様を待たせるなんて。車でお越しになれば宜しいものを。

それにて、そのような・・・」

「タマ、申し付けた時間になつたらいじに迎えにきてみようだい

幸花がタマの言葉を遮る。

「・・・かし」まつました

そう彼女は言つと、しぶしぶ車の中に戻つていき、その場を走り去つた。

彼らの姿が消え去ると同時に、彼女は彼を見ながら言つた。

「今日は先日と違つて髪を整えてきていらっしゃらないのですね

彼女の言葉に、彼は一瞬その意味を飲み込めないでいた。

「え？・・・あ、すみません。走ってきて、それでこんな状態に

藤木が恥ずかしそうに頭を搔く。

ぼさぼさな髪が、その状態に拍車をかけた。

ずり落ちていた眼鏡をそっと元の位置に上げる。

丁寧に上げないと、壊れてしまつからだつた。

「でも、仕方あつませんね」

彼女は満面の笑みを称えながら、彼の隣に来た。

「どにか案内してくださりませんか？」

出来れば私が知らないような場所に

しばらく悩んで、彼が答える。

「・・・それじゃあ、お腹空いてません？」

「え？」

彼女は目を丸くする。

面に近いことはない、出合つてすぐには食とは考えてこなかった。

「おこし洋食屋があるので、案内します」

彼女はあるで、奥の見えない山林の入り口にこもるような気分がしていた。

「・・・こつせり」お食事を?..」

午前11時45分。

『エリーゼ』と書かれた暖簾が掲げられたと同時に入ったその食堂には、

当然のことながら、客は彼ら二人だけだった。

「オムライス2つ！」と入った瞬間叫ぶ藤木に、彼女は驚いた。

「ここではそういう風に注文なさるのですか？」

「そうです。カフェーでは軽食しかありませんし。

「ううう所は、初めて・・・ですよね」

彼らは近くの木製のテーブル席に座った。

店内はカウンター席とテーブル席からなっており、

店の奥には欧洲の置物や蓄音機等が飾られていて、

西洋の雰囲気が漂っている、極普通の、彼女からすれば異世界の食堂であった。

「いえ、ただ驚いただけで……」ちらにはしばしば来られるのですか

「ええ。牧先生に良く連れて来てもううんです。このオムライスは最高なんですよ」

彼が無邪気に笑う様子は、彼女の心を飛び上がらせる。

「そういえば幸花さん。あなたの『趣味は何ですか?』

彼は思いついた様に彼女に質問した。

実は藤木は、見合いの帰りに、牧とその妻晃子に叱られたのである。

趣味を知ることは相手を知る事。

それを知らずに自分の話ばかりするのではない、と。

「・・・絵を描きます」

彼女は少し顔を赤らめて答えた。

「絵?」

「そうです。草花とか、猫とか、人物とか、光景全体とか・・・

「すうじいなあ。今持つてらっしゃつたります?」

彼はそれがスケッチ画のようなものだと思っていた。

「いえ、今は持つておりませんが、私、絵を描く事が好きで、油絵等もするんです」

今度は彼が目を丸くする番だった。

「山内さんは、芸術家でいらっしゃったのですか?」

彼が素つ頓狂な声をあげた。

「いえ。そんな大層なものでは……でも、いつか……」

「いつか？」

藤木が少し身を乗り出した。

「仏蘭西に行ければって、思つてはいるんです。

ほら、先日、モネの絵の話、したではありませんか。

あの光景を、実際にしたいなって。

それで、私も描くのが夢なんです。

同じ風景の、あの絵を……」

彼女が少しばかり目を閉じる。

その瞼の裏には、あの光景が浮かんでいるのだらう。

その姿を彼は見つめた。

同時に、ある言葉が脳裏をかする。

『運命』といつ一言が。

「山内さん、貴女は・・・」

彼が呟く。

眩しそうなものを見つめるかの『』へ、少し田舎を詠めながら。

「え？」

その眼差しに、彼女は困惑した。

そして、混乱した。

「いえ・・・。

それなりにヒローアイを出した後、良い所に連れて行ってあげますよ

彼がいたずらっぽく笑う。

湯気を立てたオムライスが一人の前に運ばれてきた。

「藤木先生、あんた今日はえらいベッピンさん連れてきてるねえ」

運んできた女性は、こここの店の主人だった。

「お嬢さん、この人、こう見えても頭が良くて面白い人だから。

仲良くしてあげてよ」

「止めてくださいよ、女将さん」

彼が恥ずかしそうに下を向く。

「ええ、私もそう思っています」

彼女は心の底から、その言葉を口にした。

前に置かれたオムライスの、

湯気に乗せられた美味しそうな匂いが鼻をくすぐつてくれる。

「ではいただきましょ！」

「・・・ええ」

スプーンを右手に持った瞬間、彼女は不思議な気持ちになった。

きっと、ここから先、未知なる世界が広がっている。

妙な確信が、彼女を微笑ませる。

「あれ？ 食べないのですか？」

きょとんとした様子で、藤木が尋ねてくる。

「え？ いえ、えっと、これはいやって食べれば良くって？」

彼女は藤木の見よが見まねで、スプーンでオムライスを掬つてみた。

「んう。ああ、早く食べてみてください」

無邪気な彼の期待に応えんが為に、

彼女はいつもよりも大きな口を開けて、それを食す。

「・・・どうです？」

「おいしいです。ひとつでも

彼女は満面の笑みで答えた。

それにつられてか、彼も笑い返す。

「あー。そうだ。今日貴女様に会つから持つてきてたんですね……」

そう言つと、彼が鞄を持って厨房のほうに向かつ。

「藤木さん？」

彼は女将さんに何か言ひつゝ、店の奥に歩いていった。

そして鞄から大きな黒い何かを取り出し、そこに置かれていた蓄音機の上に載せる。

しばらくして、彼が席に戻つて来た。

聞き慣れない音楽を背に載せて。

軽快な旋律に、初めて聞く楽器の音色。

「・・・」の音楽は?」

「」これがジャズですよ」

「・・・これが?」

彼が席に着いた。

彼女は音がする方に耳を傾ける。

体が軽くなつていいく感覚に襲われた。

心が躍りだしそうな演奏に、思わず笑みが零れる。

「いかがですか？ジャズは、僕は好きなんですが・・・」

彼が心配そうに尋ねる。

「・・・とつても素敵です。こんな音楽もあるのですね」

「良かった。今日遅刻した甲斐があった・・・」

彼が照れくさそうに笑う。

「え？」

「・・・あ」

彼が手を口で抑えたが、時既に遅し。

堪忍した様子で、彼は話し始めた。

「来る途中で貴女様にジャズを聞かせる約束をしたことと思い出しあんです。

それで家に取りに帰つたら、電車を逃してしまつたんですよ」

そう言ひと、彼は急いでオムライスを駆け込んだ。

彼女はその様子を見て、心の奥が暖かくなつていくのを感じていた。

「（）は牧先生の馴染みの店で、あの機械も西洋の置物も、

全部牧先生が若い頃欧洲で購入したものらしいて。

貴女様を（）にお連れするつもりだったから、

（）でお聞かせできると思ったのですが、結局待たせてしまつて。

申し訳あつませんでした」

彼は、スプーンを置いて、済まなそうな様子で頭を下げた。

彼女は慌てて手を振った。

「いえ、そんな風になさつてくださいたのに、謝らないで。

むしろ私の方こそ先日の無礼を貴方様に謝つておりますん」

「それじゃあ、お相ことこうことで」

彼の顔に笑みが戻る。

彼女は思つ。

この人となれば、姉達とは違つた生活を送れるかもしねい、と。

「まあ、冷めてしましますよ。早く召し上がってください」

二人はスプーンを持ち直し、皿下のオムライスに舌鼓をした。

第10話・眩しく、輝く。

「・・・ああ、おいしかった！」

エリーゼを後にし、二人は再び大学の方へ向かっていた。

時はまだ、昼時のピークを迎えたばかりだった。

通りは昼食を求める人で混雑している。

「藤木さん、どこへ向かっていらっしゃるのですか」

彼女はきょろきょろとあたりを見回した。

「大学の側にある土手です」

「土手？」

「ええ。実は、そこ僕のお気に入りの場所で、よくそこで昼寝をしたりしてるんですよ」

彼が楽しそうに話しだす。

同じ歩調で、夏の口差しの中を一人は進んで行つた。

「春は桜が満開で、夏は青々とした緑の絨毯が出来るんです。

そこで寝転がつていると、本当に幸せな気分になります。

傍には川も流れでて、水の流れが子守唄になるんですよ」

「素敵ですね」

「もうすぐ着きますよ。」「」を曲がれば、まう

道を曲がると、先ほど今まで混み合つていた道とは一点、

閑静な街路樹のアーチがある通りが真っ直ぐに伸びていた。

そして彼が指差した先は、彼女が今までに見てきたた絵の中の世界が広がっていた。

「わあ・・・。東京にもこんな場所があるなんて知らなかつた。
絵にしたら、どんなに素晴らしいかしら」

「ええ。きっと素敵な・・・、あれ?幸花さんって、おーい

彼女は土手の柔らかい芝生の上に乗ると履いていた靴を脱いだ。

そして斜面を一気に駆け上り、川に向かつて下つて行く。

彼も急いで彼女の後を追つた。

その背が視界に入る。

同時に、自分の心臓が強くその音を全身に響かせていた。

それが走っているせいなのかは、良く分からぬが。

ふいに、前方を走る彼女が立ち止まつた。

肩で息をしながら、彼女の横に立つ。

「山内さん、一体どうされたんですか・・・。突然、走り出されて・
・・・」

切れ切れの息をする彼をよそに、彼女は真っ直ぐに、広がる風景を見つめていた。

ちらり、とその横顔を見た。

その時、彼は自分の心臓が強く音を打つ理由を悟った。

一瞬、立ち眩むほどまぶしさを覚える。

ホテルのロビーでみた光よりも、まぶしいほどのものを。

そして、初めて判った。

自分の心が、彼女と再び会つことを、切に願っていることを。

「貴女は・・・すゞく・・・」

夏の匂いを僅かに強い風が、二人の間を吹きぬける。

「はい？」

長い髪を抑えながら、彼女が顔を向けた。

「いえ、あの・・・幸・・・花・・・さん」

名前を呼ばれた。

彼女は思わず彼を見つめた。

初夏には珍しく、強い風がまた吹いた。

「もしよろしければ・・・また、この土手に、一人で来ませんか。

その、今度は・・・スケッチをしに」

彼は自分の胸が、今やつきよりも速い速度でその鼓動を奏でているのを感じていた。

自分の頬が赤く染まつていくのが分かる。

そして、気のせいか、彼女の頬も少し赤いように見えた。

藤木は無性に自分の髪の毛をぐしゃぐしゃにしたい気分になつた。

「幸花さんがよろしければなのですが・・・」

「あ、はい。是非喜んで・・・。壮介・・・さん」

きらきら輝く水面に、二人の姿が見えた。

そこには、微笑み合う彼等が映し出されていた。

静かな車内の中、助手席のタマの声が響く。

「ええ。さつよ。それについて何か？」

「本当にその方なのでしょうか？藤木様とこうのは・・・」

「このようなタマの声を聞くのは久しぶりであった。

明らかに分かる、彼女の怒っている様子が。

タマが彼女に話し掛ける。

「お嬢様」

「いえ・・・。ただ、何故今回はかよつな方なのかと・・・」

今度は彼女の機嫌が悪くなる番であった。

「私の自由です。あの方が今までで一番良い方なのだから」

「しかし・・・」

「タマ。だまつて」

後部座席からの声は、鋭く尖っていた。

「・・・はい」

それから一人は屋敷まで一言も交わさなかつた。

彼が近づいてみると、それは藤木の論文であった。

「先生、何を読んでいらっしゃるのですか？」

「ええ。今日は4時から絵のお稽古があるようで……。

試しに研究室を覗いてみると、牧が何かを読んでいた。

「むう。お嬢さんとはもう別れたのかね」

「先生、いらっしゃったのですね」

「明日、同じ刑法学者の友人に会うんだね、君の論文を読んでももうおつと思つていいんだ」

「本当にですか」

彼は喜んだ。

「ああ。今回のは中々興味深い」

やつぱりと、牧はその論文を机の上に置き、藤木の方に向き直した。

「それはもうと、お嬢さんとはどうなんだ」

しかし、彼は答えを聞く前に、既に分かっていた。

みるみる内に赤くなる女の頬が、彼の気持ちを全て物語る。

牧は自分の口髭を触り始めた。

「良い事だ。近いうちに一人で飲もう。

いや、家内もお前のお母様も混ぜてやう。

今度家に着なさい。何なら彼女も連れてきて良いぞ

「からかわないでください、先生」

彼はその恥ずかしさを隠すかのように、ぼさぼさの頭を搔いた。

その姿を見て、牧が声をあげて笑つた。

「良いじやないか。二人とも相性が良さそうだ。

また来週も会いたい旨伝えておこうか？」

「・・・」

藤木は何も言わず、ただそっぽを向いていた。

「これも刑法を勉強するにあたつて有効な事だぞ」

牧が再び笑い声を上げた。

その声が部屋中に木霊していた。

「やうだ。藤木君、君に課題を課そいつ」

「課題ですか？」

牧からの久しぶりの課題といつ言葉にて、思わず反応する。

学生時代以来の課題。

その頃はあまりに難しいそれに毎度頭を悩ませていたな、と

懐かしく感じる。

「次にお嬢様に会つ時には、彼女に口付けをする事」

藤木は一瞬、その言葉の意味を飲み込めずにいた。

「・・・」

しばりくして、彼の顔は湯気が出るかのよつに赤くなつた。

「ま、ま、牧先生。な、な、何を突然・・・」

彼が牧に詰め寄る。

「何を驚くのだ」

牧は論文のページを捲りながら言つ。

「君は奥手だから、それぐら이しておかなければ、お嬢様に逃げられてしまつ恐れもある」

「い、いや、だからといつて、そ、そのような事は・・・」

藤木が物凄い勢いで頭を左右に振る。

「まあ、そこまではなくとも、手ぐらいは繋いでも良いだらう。

君はそういうことに關しては素人も良い所だからな。

「いやつて助言してもらつて感謝して欲しいぐらいだ

牧が冷め切った紅茶を啜る。

藤木は何も答えず、ただ真っ赤になりながら、その場に立ち去ってしまった。

「さ、そろそろ私も帰るが、藤木君は帰るかい？」

「・・・」

「藤木君！」

「は、はい！」

彼の両肩が同時に上がる。

「君も帰るかい？」

「え、あ、はい？」

まるで電波の悪いラジオから聞こえる様な、歯切れの悪さだ。

そう、牧は思った。

同時に微笑ましい気持ちにもなったのだが。

「全く、君は冗談も通じない男だったかねえ」

牧は「一トテ掛けに掛けられた帽子を被りながら言った。

「は・・・・冗談・・・ですか?」

「ほひ、ぐずぐずせんと、付いて来なさい」

「は、はい」

軽いため息をつきながら、牧がドアを開けた。

しかし、その顔には、

悪戯っ子の様な笑いが浮かんでいるのを、

外気温よりも高いそれを感じている藤木に知る由もなかつた。

第1-1話・進展、そして退行。

「おはよーひーざわこまわ」

既に彼女と会つてから、一週間が経とうとしていた。

その日の朝も、いつも通りの格好で、藤木は牧の研究室を訪れる。

両手には、顔を隠すぐらいの本が大量に抱えられていた。

「藤木君、おはよー。独逸語の辞書かい？」

言ひや否や、牧は独逸語の辞書を本棚から取り出し、

彼の両腕の中の本の山に、それを重ねた。

「あ、ありがとうございます」

その重たさに、思わず彼がよろめく。

「そうだ。藤木君」

部屋から出ようとしていた藤木は、立ち止まった。

「はい？」

「今日、君の4限目の授業、私にさせてもうえないか？」

「え？ 先生ですか？」

突然の申し出に、彼は危つても本を数冊落としそうになった。

「そうだ。久々に学生諸君等と関わりたいと思つてな。

別に構わんだらう。藤木君」

牧が片手をぎゅ、と瞑る。

普通、他の教官が担当する授業を代わつてもううどこいことは無い。

それも判例刑法ゼミナールといつても、

ベテランの牧が興味を持つような授業ではなく、

過去の判例を学生と共に検討するといった内容だ。

「は、はあ。確かに構いませんが・・・」

彼は重々に耐えながら、その申し出を承諾した。

「それじゃあ決まりだ。では、授業頑張っててくれたまえ」

牧の突然の申し出に違和感を覚えながら、

彼は講堂への道を急いだ。

質問を終える頃には、いつもであれば殆どの生徒は教室に残ってい

教室の隅っこに、生徒であろう誰かが座っている。

ふ、と視界の端に人の姿が映った。

藤木が黒板を消して、教壇の上に積み重なっている大量の本を抱えようとしていると、

ようやく藤木が担当する授業が終わり、生徒からの質問も一通りなし終えた所だった。

それは午後一の授業が終わった頃だった。

ない。

藤木は目を凝らしてその人物を見る。

よく顔は見えなかつたが、

恐らく授業では見かけない顔であろう。

下を見て、何かを真剣に読んでいるかのようであった。

彼は本をそこに置いたまま、その人物の方に向かつて歩き出した。

「あの、どうされました？」

彼が声をかける。

はつとしたように、その人物が上を向いた。

その瞬間、彼は息を呑んだと同時に、大声を上げそつとなつた。

「や、や、や、幸花さん…？」

「いわげんよう、壮介さん」

そこには紛れもなく、袴姿の幸花が笑いながら座っていた。

机の上には見覚えのある分厚い本が1冊開かれている。

「・・・な、な、何故ここにいらっしゃるのですか？」

「先日、牧先生から電話をいただいて、

『刑法に興味はありませんか?』と尋ねられたんです。

壮介さんが専攻なさつてゐる法律だから、少し勉強してみたいなど思つていたので、

『はい』と答えました。

やつしたり、今日、講義に出てみたうどつかと言わねまし

彼はただ、開いた口をぱくぱくさせていただけであった。

「更に牧先生、『親切なこと』、3日前に私の家まで来てくださいって、

刑法の基本書までいただきました。

これで勉強されると良いと

彼女が机の上の本を指差し、そしてこいつと微笑んだ。

「や、ついでいらっしゃったのですか」

そういえば、3日前、牧の研究室に入った時、

基本書が机の上に置かれていた。

何故今更、と疑問には思つたものの、

特に気にもしていなかつた。

そう思つたのと同時に、藤木の頭に片田をさす、と睨つた牧の顔が浮かぶ。

そして先日の牧の声が蘇る。

『手ぐらご繫ぎなさい』といつ言葉が。

彼の心臓が、急スピードで高鳴り始める。

「いや、ちょっと、まだ・・・」

突然彼が頭を左右に振り出した。

「・・・?どうされたのですか?」

幸花が不思議そうに尋ねる。

「え?あ、い、いえ。何でもないです」

彼が真っ赤になりながら慌てて答えた。

「・・・変な社介さん」

彼女は首をかしげながら、机の上の本を閉じた。

「ところで壮介さん、この後はまだ授業がおありますか？」

「え、いつもなら授業があるのですが、今日は牧先生が・・・」

そう言い掛けで、彼は今朝の牧の言動を思い出した。

「こういう事だったのか・・・。

「壮介さん？どうされましたか？」

「え？あ、え。何でもありません」

藤木は小さく溜息を付いた。

「それではまずあの本を研究室に置いてから、どこか参りましょうか

「はい」

二人は教壇の方に歩き出した。

「す、」い量の本ですね・・・」

「おかげで腕だけは逞しいんですよ」

彼は苦笑しながら本を抱え込む。

「少しお持ちしましょうか?」

「いえいえ、そんな・・・て、幸花さん

彼女は彼の返事も待たず、上のほうの数冊を取り上げた。

「さ、行きましょう」

彼女は笑いながら教壇を降りて行つた。

彼は呆気にとられながら、

同時に少し照れ臭く思いながら

その後ろをゆっくり歩いた。

「お嫌いですか？活動写真」
「・・・本当にこれを見るのですか？」

彼等は新宿にいた。

活動写真が見たい、といつ彼女の要望で、新宿の劇場に来たのだった。

「いえ、ただ、これは、その・・・」

こじは新宿でも有名な活動写真が見れる劇場だった。

弁士の語りも中々と評判で、休日になると、長蛇の列ができた。
(*1)

今週の作品は、ホリーウッドのものだった。 (*2)

「恋愛を題にした作品ですが、駄目ですか?」

彼は、映画館に掲げられたポスターを複雑な思いで眺める。

「いや、僕、こじはのは初めてで・・・」

頭をしきりに搔きむしめた。

さつきから牧のあの笑顔と台詞が脳裏から離れない。

そのせいか、妙に彼女を意識してしまつ。

それなのに、こんな映画を見たら、

ますます恥ずかしくなつてくる事は請負だ。

先日の大審院の事例よりも取り扱いが困難な問題に、

彼は非常に頭を悩ませていた。

「それならば尚更良いではないですか」

彼女はそつこいつと、切符売り場の方に走つて行つた。

「あ、ちょ・・・。幸花さん」

情けない呼び声を上げながら、彼は彼女の後を追つた。

「良いお話をしたね」

劇場を出ると、既に外は暗くなっていた。

幸花が嬉しそうに、そう藤木に話し掛ける。

しかし、返事は返つてこない。

「壮介さん？」

彼女が顔を覗き込んだ。

「あ、え？・・・あ、わわ・・・」

彼が慌てたように数歩後ろに退く。

「壮介さん、今日はちゅうと様子がおかしいですよ。熱でもありますか？」

「え、い、いや、そんなことありません。僕はいたつていつも通りですむ」

藤木の顔が赤い。

幸花が心配そうに言ひ。

「もしかして無理していらっしゃった？」「あれば」「めんなさい、私、無理矢理・・・」

彼女が悲しそうな顔をした。

「い、いえ！ち、違います！断じてそのような・・・」

彼が両手を急速に振る。

「が、学生時代以来だつたんで、かなり楽しめました」

彼は微笑みながら、右手に持つ劇場パンフレットをペラペラ捲る。

内心では、やはり、かなりの動搖を覚えていたのだが。

その瞬間、彼は生まれて初めて牧を恨めしく感じざるを得なかつた。

「米国のキネマは初めて見ましたが、中々面白かったです。

あの一人、最後は結ばれて本当に良かつたですわ

まだ映画の余韻から抜け出せていないのだろう、幸花がうつとりしてようく咳く。

作品の内容は、身分違いの恋に悩む男女の物語だった。

「弁士の語りも素晴らしかったですね。

ちなみに、米国ではホリーウッドの映画が主流で、多種多様なもののが作られているそうです」

平静を振舞うため、彼が彼女の半歩前を歩く。

彼はパンフレットを丸めて、それで顔を仰ぎ始めた。

「そろそろ戻りましょう。お迎えは学校の方に来られるのでしょうか？」

？

一瞬、彼女が何かを言いかけたように見えたが、彼女はそのまま「はい」と答えた。

「時間があれば、ヒリーゼで軽く食事をいたしましょう」

一人は急ぎ足で駅へ向かった。

彼が困ったように頭を搔く。

「うーん、この時間じゃ間に合わわないな・・・」

「7時30分頃に迎えがいらっしゃるのですよね。

駅に着く頃には、既に夜の7時近くになっていた。

ヒリーゼまでは駅からだと10分はかかる。

「……あの、それじゃあ……」

彼女が何かを言つ出した。

しかし、語尾が消え入るよつに少しく、良く聞き取れない。

「はい?」

「……先日連れて行つて下さった土手に寄り道しませんか?」

そつすれば時間的に丁度良いと思ひます

「お安い御用ですよ

空にはランプの光と月光が、眩しく街を照らしていた。

わ

「ここは月と星の光の洪水なのですね。私の家の周辺とは大違ひだ

「何が思われた通りなのですか」

二人は土手に腰を下ろしていた。

彼女が嬉しそうに呟いた。

「やっぱり思った通りだわ」

無邪気に喜ぶ彼女の隣で、彼が笑う。

「ええ。 ここだけはランプが置かれていませんから」

「本当、夜空の輝きが眩しい位だわ・・・。

先ほどの活動写真の一人が出会った場所でも、

このように星空が広がっていたんでしょうね。

私、この風景もカンバスに留めたいな・・・」

彼女が夜空を見つめる。

ふ、と彼はそんな彼女の横顔を垣間見た。

その時、藤木は心底不安になつた。

自分の心音が相手に聞こえ伝わつてしまつのではないか、と。

「眩しさなら負けでいらっしゃいませんよ。むしろ・・・」

彼は無意識のひび言葉を口にした。

「え？」

彼女が彼の方を向く。

「いえ・・・。何でもありません」

彼は彼女から田をそらじ、夜空を見上げた。

「やあやあ、行きましょうか」

彼女が立ち上がった。

が、その瞬間、彼女が足を滑らせた。

「あやー！」

藤木は反射的に彼女を助けようとして、咄嗟に立ち上がり、

両手を前に差し出した。

「・・・大丈夫ですか？」

ふう、と大きく息を吐く。

「・・・ええ。危ない」ところを・・・」

彼女も同時に安堵の吐息を漏らした。

しばらくの間、二人は感じた安堵に気をとられていた。

「・・・あ・・・すみません」

藤木は我に帰つた。

彼は彼女の両手を握っていたのである。

急いで外そうとした。

が、左手だけ、外せない。

正確に言つと、外せなかつた。

彼女が、しつかりと彼の手を握つていた。

「・・・もし、宜しければ・・・」

うつむいた彼女が、呟く。

「学校までの道のり、このままで歩きませんか」

彼も同時にうつむいたまま、蚊の鳴く様な声で応じる。

「・・・人がいたら、教えてくださいよ」

二人は土手を離れ、学校までの道をゆっくりと歩いていった。

「何？」

幸花は窓の外を見つめていた。

天井に跳ね返る水の音が聞こえる。

何時の間にか、外では雨が降り出していた。

「・・・お嬢様」

「・・・お嬢様は、本当にあの方と御結婚されるおつもつですか？」

幸花が運転席の鏡を見る。

「・・・何が言いたいの？」

「差し出がましいかもしませんが、私としては、

お嬢様とあの方は合わないかと」

静かな、そしてはつきりとした口調だった。

そこには映ったタマの厳しい表情は、今まで見たことがなかった。

見合いを散々に終わらせた時でさえ、このような顔はしなかったのに。

「何故やつひつの？」

「・・・」

タマは何も言わない。

ただ前を見つめているだけだった。

その先には、彼女の知らない何かが映っているようだった。

雨音が響く。

狭い車内に、強く、激しく。

「先日の如く、根拠が無いのであれば、そういう事は言わないで欲しいわ

「・・・申し訳ありません」

タマが頭を下げた。

静けさだけが、車内を漂っていた。

大きな溜息をつぐ。

「はあ・・・

頭の中では、その日のある会話がわざわざから何度も繰り返されていた。
タマは家路に着いていた。

「・・・・さうじかじら

「は、いつのまにか止んでいた。

「どうしたものかしら・・・」

2度目の溜息が、静かな夜道に響き渡る。

その日の晩、幸花を送った後、タマが屋敷に着いた時の事だった。

玄関近くを歩いていると、

傍の花壇で作業をしている一人の女中が会話をしていた。

「ねえ、知ってる？お嬢様、

今日は前回のお見合い相手とお出かけなさるらしいわよ

「まあ。あんなにお見合いを嫌っていたのに、

どうこう風の吹き回しからねえ」

最近入りたての若い女中達だった。

じつこつ噂は、女中の秩序維持を壊しかねない。

そう考へて、タマは一人に注意をするため、近付こつとした。

「それもね、相手なんだけど、

帝国大の助教授で、藤木つて名前らしいんだけど」

「だけど？」

その含みを持つ響きに、思わずタマも耳を澄ませる。

「それがさ、私、その人知ってるんだ」

「え？ 何で？」

同じ料白を、彼女も心の中で言った。

「実家の傍に住んでるんだけど、その人凄く貧乏なのよ」

聞こえてきた言葉に、耳を疑う。

「住んでいる家がボロボロで、着ている服も着たきりズズメなの。

それに、確か病弱なお母さんを抱えてると思ったよ

タマは背筋に氷水をかけられた気がした。

「え？ 裕福な人じゃないの？」

「うふ。・・・何でかねえ。山内家は裕福だから、良いのかなあ」

タマは、絶句した。

足が土に張り付いてしまったかのように、じまいへ彼女はその場で立ち去っていた。

タマは夜空を見上げた。

ランプの無い夜空に輝く月が、眩しかった。

「…………やまつ、やつやべりやね…………」

タマは踵を返した。

そして、今来た道を、逆方向に進み始めた。

「旦那様」

「タマ。帰つたのではなかつたのかね。忘れ物か？」

廊下で幸花の父英雄が歩いていた。

涼しげな和服に身を包んだその姿は、夏の風情を感じさせた。

「旦那様、お話したことあります

こつになく険しい表情が、彼の背筋を伸ばしていく。

「どうした、改まつて」

「・・・居間の方まで、」一緒に願います

そう呟くと、彼女は応接室のまづへ独り歩き出した。

注

(* 1)

活動写真（無声映画）を上映中、その内容を語りで表現して解説する専門の職業。

(* 2)

現在のハリウッド（Hollywood）

第1-2話・傳い夢

「お嬢様」

扉を叩く音とともに、タマが部屋に入ってきた。

「何? タマ」

幸花は鼻歌を歌いながら、鏡台の前で髪を梳かしていた。

その姿をして、心の奥が少し苦しくなるのを、

タマは感じていた。

「お父様がお呼びでござります。居間に来るよつこと仰せつかつて
おつます」

「居間に? いかがされたのかしら」

彼女は櫛を置いて、立ち上がった。

「ありがとう。今行くわ

彼女はタマに微笑んで、居間へと向かった。

タマは何も言わず、その後ろを付いて行った。

「お父様、お呼びですか」

父の英雄が、ソファの上で前かがみになつて、座っていた。

その甲は厳しく、そのまま話しだす。

「……座りなさい。話がある」

顔も上げずに、そのまま話しだす。

胸騒ぎがした。

険しい様子の横顔が、これから話の内容が良くないことを伝えてくる。

「……いかがなさったのですか

恐る恐る尋ねてみた。

父は直ぐには口を開かなかつた。

しばらくして、二人の間を流れる沈黙が破られる。

「今までのことは、なかつたことにする」

彼女は、父が何のこと喋っているのか、分からなかつた。

「……どういふ意味ですか？」

「……彼との見合いは、無かつた事にする」

「え？」

ようやく、父が意味する事が明らかになつてきた。

同時に、彼女の手に、冷たい汗が滲み出す。

「お父様。おっしゃつている事が、私にはよく理解できません

気がつけば、手足が小刻みに震えていた。

「とにかく、また違う人と見合ひをしなさい。そういうことだ」

父はそう吐き捨てる、突如立ち上がり、部屋を出て行ってしまった。

「待つてください……お父様。」

「一体どうこうことなのですか？」

幸花には理解できません。

「何故そのような事をおっしゃつていらるのですか？」

必死の思いで、彼女は叫んだ。

父の足が止まる。

刻まれた眉間の皺が、一層深くなる。

「……彼は幸花に相応しいとは思えない」

「お父様！幸花は納得できません！お父様だって、食事の時……」

「口答えをするなー。」

突然の大声に、彼女は押し黙つた。

生まれて初めて、父の怒鳴り声を耳にした。

「とにかく、もう彼とは会つてはならない。」

「彼のことは忘れなさい。」

「それだけだ。戻りなさい。」

ばたん、と大きな音をたてて、扉が閉まる。

「・・・どうして・・・」

一言、それだけが彼女の口から零れた。

田の前の世界が、果ても無く回り続ける感覚に襲われる。

彼女はじょりの間、その場に立ちぬいていた。

「おまよいひ、アヤコ先生」

牧の研究室のドアを開けた。

「・・・藤木君か」

椅子に座っていた牧が顔を上げる。

心なしか、普段より声に張りが無い。

「どうされたんですか？元気が無いようですが

牧が一度口を開け、閉じる。

何かを躊躇しているようだつた。

「・・・君に伝えることが2つある。

良い事と、悪い事だ。どちらの方を先に聞きたい？」

そんな一問一答、出来ればあつて欲しくなかつたが。

そう、彼は考えた。

しばらくして、彼が答えた。

「悪い方から、お願ひします」

彼がにっこりと微笑む。

牧は大きなため息をついた。

珍しく緊張した面持ちを、牧はしていた。

「・・・先ほど山内殿から連絡があった。

見合いの話は、無かつた事にして欲しいということだ

牧が、光の刺す窓の方に目を遣った。

「理由は？」

藤木は落ち着いた様子で尋ねた。

「・・・先方に君の情報が誤って伝わっていたようだ

「僕の？」

牧は窓の外を眺めたまま話し続けた。

「私に実際見合い相手を探すよう頼んできた者が、

君についての誤った情報を山内殿に伝えていたようだな・・・。

その、ほら、君の・・・」

藤木は、電話が掛かっている方を一瞥した。

断られた理由。

誤った情報。

大方の予想は付く。

何の情報についてか、なぞ。

「・・・そうですか。それは残念です

彼は静かに微笑んだ。

「先生、そんな済まなそうな顔をしないでください。

元々僕は女性とは縁がない人生です。

それに、元々不可能ですよ。

僕みたいな貧乏学者で、あのよつた女性を養う事は。

むしろそれで良かつたかもしません。

といひで、良い話の方とは?」

牧が我に帰ったように、藤木の方を向いた。

「ああ。昨日、友人に君の論文を見せたら大層興味を持つてな。

是非君に今度の学会で発表するように言つていたよ」

「本当ですか?」

彼が大きな声をあげた。

「ああ。それも、友人は……ほら、彼だ。野村君だ」

「野村先生ですか？それは光栄です」

野村教授は、政府でも法学者として立法分野で活躍している教授だった。

「それに、学会の発表が成功すれば、

今度の国費留学対象者に、君を推薦したいとも言つていた」

「・・・本当にですか？」

昨年、1年間大学から留学を経て、更なる研究を進めたいと思つていた彼には、

願つてもない機会だつた。

「お母様の心配はするな。

また前の留学のときの様に我々の所に来れば良い。

内の家は、部屋は腐るほど空いているから」

牧はそう言つと、立ち上がりつて藤木に近づいて來た。

そして、彼の肩を軽く叩いた。

藤木は、ただその唇に微笑を称えていた。

「では先生、僕はそろそろ授業の準備をしなければ」

彼は自分の研究室へと戻つて行つた。

ぱたん、と扉の閉まる音が研究室に響く。

その音は、いつもより小さく、牧には聞こえていた。

その橙色の光が、胸の奥をざわつかせる。

夕日色の光の中に腰を下ろす。

何故か無性に、ここに立ち寄りたくなった。

授業が終わって、帰路についていた途中、

帰り道に寄る事は初めてだつた。

藤木は大学近くの土手にいた。

後20分もすれば、今は夕焼け色に染まるその場も真っ黒い闇で染め上げられていく。

何故だらう、藤木は考えてみた。

思ひ当たること。

今朝、見合いをした女性に断られた旨、告げられた。

これだけしかない。

でも、それは同時に、

それだけの事に過ぎない。

これは、それ以上の、又はそれ以下の意味も成さない。

その事は痛いぐらい、良く承知している。

ふと、彼女と会った時に感じた眩しさを思い出す。

眩暈にも似た感覚を生じさせる、強い輝き。

不意に胸の奥底が苦しくなった。

「あ、と締め付けられるような苦しみが、

全身へと広がっていく。

むりくつ、むりくつ。

じわり、じわり、と。

「もう、会えないのか・・・」

あるがままの事実を言語化を試みた。

不思議なことに、胸の痛みが更に強まっていく。

息ができなくなる位、それは胸を締め付けていった。

彼は両膝を抱え込んだ。

顔を膝に埋める。

目頭が痛いぐらい熱く感じられた。

生暖かい風が、彼の傍を吹き抜ける。

夏の残り香が、その場を渦巻いていた。

第1-3話・決まつていた、運命

「幸花は今どうしている」

長い廊下で、初老の男性が心配そうな様子である女中に話しかける。

窓の外からは、残暑に負けんとばかりに、威勢の良い蝉の鳴き声が聞こえてくる。

「はい。部屋に籠つつきついでいるからます。お食事もあまり手を付けておりません」

女中も同じような様子で、その質疑に応答する。

「もうあれから一週間にもなる。タマ。どうにかして幸花を説得してくれ」

男性が大きな、そして長いため息を付いた。

「・・・かしらました」

タマが立ち去りとした時、彼が呟いた。

「私は、間違っているか？」

タマは、その歩みを止めた。

「・・・旦那様・・・」

彼はタマの方を向いた。

「君だつたら、そのまま結婚させるか？」

愚問である。

答えなど、明白過ぎる。

それも、『あの人』と結婚していたこの人であれば、尚更だ。

そう、彼女は思った。

「身分が違つ者同士の結婚は、私と妻で十分だ。」

あの彼も苦労するに決まつていてる」

沈黙だけが、その場を漂つていた。

蘇り出す記憶。

バラバラになつていった記憶の欠片が、

その原型を取り戻そうとする。

「旦那様は、奥様と結婚されたことを、後悔されていらっしゃるのですか？」

しばらくして、彼が口を開いた。

「・・・彼女にはたくさん辛い思いをさせた。

彼女をこんな金に汚れた世界に連れてきてしまい、寿命を縮ませたのは私の責任だ。

君も知つてゐるだろう、彼女の苦労を」

丁度、この家で働き始めた時を思い出した。

そして一緒に働いていた、自分と同期の、女中のことを。

気がつけば彼女は当家の一人息子と恋に落ち、周囲の反対を押し切つて結婚した。

立ち入ってはならなかつた筈の区域に、彼女は無謀にも独りで飛び込んで行つた。

タマは数少ない彼女の見方として、最期まで彼女の傍にいた。

『女中』として。

そして、『友達』として。

「あのまま、彼女を諦めて同じ身分の者と結婚していれば、

彼女は今もどこかで生きてくれたかもしれない。

そう思つと・・・

彼が言葉を詰まらせる。

「・・・旦那様」

無謀な彼女も、決して何も考えなかつた訳では無い。

それだけは、タマは確信できた。

何かを彼に伝えたい。

だが、それを自分がどのように表現すれば良いか分からなかつた。

そもそも、表現して良いのかさえも。

ただその場で、その背中を見つめているしかなかつた。

いつもは大きく見えるそれも、今だけは、とても小さく見えた。

「・・・娘にまで苦しい思いは、させん必要はない。」

やつ、思ひのが普通ではないか・・・」

蝉の鳴き声が、廊下中に響き渡つていた。

「お嬢様 入つても宜しいでしょうか」

タマがノックをする。

しかし、返事は無い。

「・・・お嬢様」

ドアノブに手をかけ、ゆっくり回す。

ぎこゝ、と軋む音と同時に扉が開く。

「お嬢様・・・?」

部屋は畳とは思えないくらいの暗さだった。

ベッドに顔をうずめる姿が見える。

彼女はそつとその隣に腰掛けた。

「幸花お嬢様・・・」

「・・・」

彼女が顔をあげた。

大きな目は、開けられないくらいに真っ赤に腫れていた。

頬も鼻も赤くなっている。

タマが彼女の髪をゆつくりとなで始めた。

「お嬢様。元気をお出しください。タマは・・・」

手を彼女の髪から離した。

彼女は次にかける言葉を見つけられなかつた。

代わりに、幸花がその口を開く。

「・・・夢だつたら良いの元」

鼻にかかるつた声で、呟いた。

「全部夢だつたら良いの元。醒めてしまえれば、それで・・・」

タマは何も言えなかつた。

「学者とわえ結婚すれば、それで良かつたのでしう?」

それなの元、何故・・・」

再び、その瞳に涙が溢れる。

タマがようやく話し始めた。

「幸花お嬢様。貴女様は山内一族の一員でござります。

お嬢様はそれに相応しい方と御結婚なさらなければなりません

彼女はタマを見つめる。

泣き疲れた顔が、青白い。

「……じつこいつ事つ。」

タマは続けた。

「あのお方は、お嬢様とは全く違う世界の人間だったのです。」

つまり、庶民階層の人間なのでござります。

山内家の一員である以上、庶民と結婚するなど、世間が許しません

薄暗い部屋に、静けさが漂う。

あの時言つべき筈だつた言葉を今、伝えている。

その遅さが、滑稽な位に悲しい。

しばらくして、幸花がそれを消した。

「・・・だから？」

幸花の声が震えていた。

「だから何なの？」

私は、私は世間の為に、山内家の繁栄の為に結婚するのが義務なの？

お姉様達みたく、好きでもない人と暮らして、

夫婦共に外で他に愛人作ることが結婚なの？

そんな生活送るぐらいなら山内の名前なんか要らないわ！」

幸花が大声を絞り上げた。

タマはただ、幸花を見つめていた。

「お嬢様。世間はそんなに甘くないのですよ」

タマが諭すように言った。

「私達は生まれつきそれぞれの身分があり、そこには義務があるの

です。

貴女様は貴女様の身分がござります。

そして、私には私の身分がござります。

私が貴女様にお使えするのも、身分故に課される義務だからでござります。

これは永遠に変えることはできない、運命なのです」

強く、厳しく、

世の理を教えてやるねばならない。

山内家の女中として。

「・・・そんなの・・・」

タマはそれ以上何も言わなかつた。

幸花は無言のまま、再びベッドの上にその顔を埋め、

止まらない何かを、ただただ流し続けるのであつた。

「野村先生、ありがとうございます」

「藤木君、君、本当に素晴らしいよ！」

学会の終了と同時に、藤木が座っているところに、背の低い男が近づいて来た。

そして、藤木の手を握り、上下に激しく揺らす。

彼は急いで立ち上がった。

「いや、お世辞ではない。

私は感動して鳥肌が立つたくらいだ。

牧先生、貴方は本当に優秀な弟子をお持ちになられた

隣で得意そうに笑う牧が、大きな口ひげを何度も何度も触る。

その日は帝国大の講堂を会場とした、学会が開かれていた。

「いえいえ。滅相もございません。

まだまだ彼は若いですし、研究も未熟でござります

「何をおっしゃる。これは早速政府の方に藤木君を留学候補者に推薦しなければ」

夏の暑さも無を過ぎた頃だった。

その日の藤木の論文の発表は、学会でも高い評価を得ることができ、

たくさんの学者からの支持を得る事が出来た。

「共犯論の根幹を搖るがしかねない理論である。

これならば独逸の学者の間でも受けを取らぬでござりこましゅう。

出来る限り早急に政府の方に申し立てておきましゅう。

早ければ、今年中には独逸に行けるかもしぬません」

独逸。昨年までいた、遙か遠い歐州の国。

刑法議論の最先端が、彼を待つてゐる。

藤木は心底喜んだ。

少しばかりの苦さが、そこに紛れている事に気づかないで。

「ありがとうございます」

彼は再び野村の手を握り、頭を下げた。

「何、礼には及ばぬ。君の実力ですよ」

野村が笑いながらその手を揺すった。

目の前に、確たる未来が一瞬見えた気がした。

初めから、そう決められていたのだろう。

そういう運命だった。

そういう…。

「…・藤木君? いつまで握手しているつもりですか?」

「え? あ、はじめんなさい」

藤木は慌ててその手を離した。

「ははは。よつまど嬉しいよつですね」

3人が一斉に笑い出した。

講堂にその声がこだまする。

それが彼の心の片隅に、

じん、と響いた。

第1-4話・雨の強さに打たれながら。

「それでは野村先生、詳細は後ほど」

牧がかぶっていた帽子を右手で軽く持ち上げた。

「ええ。後日研究室の方にお伺いします」

野村はそう言つと、同じよひに帽子を少し持ち上げて、車内へと乗り込んだ。

白い煙が、その場に一瞬立ち込める。

「雲行きが良くなないな。一雨振るかもしけん」

車が過ぎ去る様を見送りながら、

薄暗い空を見上げて、隣にいた牧は呟いた。

「藤木君、乗つていいくだろ?」

講堂を出たといひて、大きな黒い車が彼の前に止まつた。

「申し訳ありません。今日は寄る所がありますので」

時は午後5時を回つていた。

他の学者達も、それぞれ自らの帰途へ着き始めている。

「……さうか。それじゃあ、また明日」

牧はそう言つと、そのまま車に乗り込んで行つた。

彼は感じていた。

その階中に掲げられた優しさを。

「はい。また明日」

ばたん、とドアが閉まると同時に、白い煙を吐き出して車は去つていつた。

彼はその場で、その姿が見えなくなるまで、佇んでいた。

藤木はひたすら道を歩いていた。

寄る所など、本当は何処にも無くて。

ただ、歩きたい。

ふらふらと、彷徨つ子羊のよつこ。

それが牧の申し出を断つた理由だった。

ひたすらに、道が続く限り、脚の動きを続けていく。

自分が何処にいるのかさえもよく分からぬ。

何故こんな気持ちになるのか、自分自身に問い合わせてみても、

明確な答えは導き出せない。

だからといって、歩けば答えが出るまでも無くて

ただ、彼は少し休みたかった。

忙しそうな頭を、少しの間だけでも休ませたかった。

モヤモヤした、得体の知れない何かが心の片隅にこびり付いている。

そこまではよく分かっているのだけれども。

同時に、どこかそれが滑稽に感じられた。

自分で自分が、よく分かっていないなんて。

皮肉な笑いが、溜息に変わつていった。

ぽつ、と何かが顔に当たる。

ぽつ、ぽつ、とそれは次第に数を増やしていく。

そして、

しまいにはそれが集団の形になつて、地上のすべてにぶつかついていた。

牧が言つた通り、

何時の間にか空は、その姿を漆黒の闇に包まれ、大粒の雨を降り落としていた。

前髪から滴る雨粒が、眼鏡に映る光景を曇らせる。

しかし、それは彼を止めるほどには十分の力を持ち合はせていないようだった。

彼の耳には、雨が道を打ちつける音しか聞こえない。

彼は歩みを止めなかつた。

ただ、歩き続けた。

見慣れない景色が続いても。

雨が、体に染み込んで行く。

着ている服にも、同様に。

砂漠の土地に、水が染み入るかのようだ。

心地よい冷たさと体に感じる重みが、

彼の歩みを助けていた。

何が彼をやつせたのかは、分からぬ。

じまし、その場に立ちぬく。

彼はそいどよつやへ、その歩みを止めた。

ある所の道の角を曲がると、そこには洋風の大きな屋敷が建っていた。

そろそろ体に疲れを感じ始めていた頃。

どれくらいこの距離を歩いたのだらう。

彼は何もすることなく、雨に打たれながら、ただその屋敷を見つめていた。

いつの日にか見た歐州の風景が、

目の前に再現されてくる。

よほどこの財力の持ち主だろう、

そんな取り止めの無い事を、藤木は思った。

そして、彼は再び、その歩みを続けようとした。

その時だった。

ぎこ、といっ音と共に、門の所で人の気配がした。

その人は少しの間、その場に立ち止まり、

傘もせさず、歩くずぶ濡れの彼を見ていようつだった。

初めは気にせずに歩いていた彼も、

その視線の強さに、振り向かずに入れなかつた。

「・・・貴方は・・・」

一人はしばらく黙つたままだつた。

「何故ここにいらっしゃるのですか?」

振り落ちる雨音の中で、彼はその人を見詰めた。

彼に鋭い視線が投げかけられる。

「ここは貴方の様な方が来られる場所ではございません。」

「早急にお引取りください」

その人が近づいて来る。

「じしゃぶつの雨の中、足音が何故かよく聞こえた。

傘の影でよく見えなかつた顔が、はつきり見えてきた。

「・・・タマさん、でいらっしゃいましたよね」

彼が呟いた。

「貴方様は此処に来られる資格などございません。

山内家を欺いた罪の大きさは、例え故意でなくとも計り知れません。
お引取りになられないのであれば、警察の方に連絡をいたしますよ

厳しい声が、雨と共に彼を突き刺す。

「申し訳ありません。

歩いていたら、立派なお屋敷が見えたので、つい見とれてしまつた。

「……」が山内様の邸宅であったとは露知りません。

無礼をお許しください」

彼は静かに頭を下げた。

その口元に、そつと微笑を浮かべて。

そして、無言のまま、自らの歩んできた道を進み始めた。

背後からの視線がちくちく痛みを疼かせる。

が、しばらくして、その足が止まった。

彼は振り向きもせず、じつ尋ねた。

「……タマさん。一つだけお尋ねしたいことがあるのですが……

」

雨音が、二人の会話を遮りうつする。

「貴方様に話すことは何もないぜこまさん」

即座の返答に、沈黙が続いた。

言葉は無い。

ただ雨の降り続ける音が、じだます。

そしてじばりくして、彼は再度口を開いた。

「幸花ちゃん、お嬢様は、今尚笑つておられますか？」

タマは何も答えない。

彼は彼女の方を向かず、そのまま話し続けた。

「お嬢様が元氣でいらっしゃるか。」

間違つても落ち込まれたりしていないか。

それだけが、僕の気掛かりです」

静かな、それでいてしつかりした声が、その場を駆ける。

その瞬間、彼は悟った。

ああ、これだつたのか、と。

「・・・お嬢様は、貴方と別れて清々した、そつおつしゃつていら
つしゃいます」

響く。

冷たく、激しく。

雨の音が。

耳の奥に。

心の奥底に。

深く、更に深く。

「ナニですか。

それを聞けて安心しました。

申し訳なかつた、そづ一言、お嬢様に云えてくださいと幸いです

そう言つと回り言つて歩き始めた。

後ろを振り向くことも無く、来た道を真っ直ぐ。

彼女はしばらくその場で、濡れた彼の背を見詰めていた。

雨音だけが、激しくその場に響き渡っていた。

「母ちゃん、そういうことだから、

またしばらぐの間、牧先生の家に居る事になるかもしねいけど・・

・

彼らは縁側に座っていた。

藤木は湿った手拭いを首にかけていた。

夜も深くなり始めた頃だった。

冷え切った体を温める為に、

帰宅後直ぐに風呂に入った後、彼は母に留学の件を告げた。

雲間から顔を覗かせる満月の光が、庭先を明るく照らす。

夜だけの鈴虫の合唱が聞こえてきた。

「ナハ。お土産頼んだわよ。欧洲のお菓子はおこじこから、ナハ
くね」

母は笑いながら、蚊取り線香に火を付けた。

「うん。頑張ってくらから」

先ほどまでの雨と打って変わって、静けさが漂つている。

秋の到来が、もう田の前に迫っていた。

「・・・壮介」

「何?」

母が何かを言いかけた、その時だつた。

どん、どん。

誰かが玄関を叩く音が聞こえた。

「こんな時間に誰だらけ。ちょっと見てくるよ」

彼は手ぬぐいをはずし、

隣に置いていた洋式のランプを右手に持ち、玄関に向かった。

母は、彼の後姿眺めていた。

第15話・眞実と現実の狭間で。

「はい、どちらさま・・・」

玄関の扉を開けると、真新しい記憶に残っている女性の姿が、そこに立っていた。

「・・・よくここがお分かりで」

彼は穏やかに言った。

「少しばかし、時間を頂けますでしょうか」

彼は玄関方から外に出て、戸を閉めた。

ガラガラ、という音が大きく響く。

彼女は彼をして、何かを躊躇つてゐる様だった。

何も聞こえない。

ただ、鈴虫の歌声のこだまを除いては。

少しして、彼女が静かに話し始める。

「・・・私のせいです」

「はい？」

唐突な彼女の言葉が、その場を浮遊する。

「私が旦那様に申し上げました。貴方様が庶民であることを

突然のタマの発言に、藤木は戸惑つた。

鈴虫の鳴き声が、静けさの中で、そのか細々と響かせていく。

「ある日偶然、私は貴方様が庶民であることを知つてしましました。

私はとても悩みました。

この事を、旦那様に伝えるべきかどうか。

そこで、いつも考えたのでござります。

お嬢様は今まで苦労などしたことないでござります。

世間知らずのお嬢様がこのまま貴方様に嫁ぐことになれば、必ずやお嬢様本人のみならず、

貴方様までをも苦しめる事になる、と

頭上に輝く満月が、柔らかく彼らを照らす。

「違つ身分同士の結婚は、祝福されません。

下からは妬まれ、上からは恨されます。

貴方様も学者様であれば、このような事はお分かりでしょう

タマは吸えるだけの息を胸に取り込んだ。

「わざわざその事をお云えに・・・?」

「いえ、それだけではござりませぬ」

彼女は少し俯いた。

「私は先程、貴方様に嘘を付きました。

お嬢様は元氣であると。

しかし、実はお嬢様は貴方様に会えなくなつてからといつもの、

毎日泣いて暮らしておつます。

あんなに悲しまれるお姿は、

お母様がお亡くなりになつて以来でござります」

タマが悲しそうな顔をした。

「タマは耐えられません。

あんなお姿を見続けるのは。

そこで恥を承知で、

貴方様に頼みたいことがござります」

「何でじょひ

彼が優しく微笑んだ。

これ以上無い程に。

少しの躊躇いの後、静かに彼女が呟く。

「・・・お嬢様に一度、会つていただけませんか。

会つて、貴方様を諦めるより、説得してくださりませんか」

沈黙が再び落とされた。

鈴虫の鳴き声が、彼らの間をさ迷う。

彼は瞼を落とした。

そして瞳を閉じたまま。彼が口を開いた。

「その必要は、ございません。

僕は早ければ年内に独逸に向かつ予定です。

日本には当分帰れません。

僕達は縁が無かつた、と。

そう、お嬢様にお伝えください

藤木は瞼を開き、再び微笑んだ。

開いたその瞳に、迷いは映つていなかつた。

彼は分かつてゐた。

今こそ幕を引く時なのだ、と。

所詮、身分違ひの恋など、西洋の映画のように実るはずがない。

現実とは、そういうもののなのである。

「・・・承知いたしました。タマの無礼、どうかお許しくださいま
せ」

タマが、深く頭を下げる。

「いえ。僕の方こそ、故意ではございませんが、

身分を偽っていた事を謝罪しなければなりません」

彼も同じく、頭を下げた。

そして、彼女は顔を上げ、出口の方にその足先を変えた。

「・・・藤木様」

しばらく歩いて、タマが立ち止まった。

「貴方様は、お嬢様のことをお好いでいらっしゃいましたか

暫くして、彼女の背中に暖かな言葉が反射した。

「ええ。 サツ・・・だつたよひです」

何も言わず、タマは再び歩き始めた。

彼はその姿を、見えなくなるまで見送った。

暫くの間、彼はその場で、

胸の奥でじわりと疼く締め付けてくる痛みを、噛み締めていた。

第16話・想い。

「誰だつたの？」

縁側に戻ると、茶碗が2つ用意されていた。

彼の湯飲みには、湯気が立っていた。

「ちょっとした知り合いだよ。

大した用事ではなかつたけどね」

彼はそれを持ち上げ、温かいそれを飲んだ。

その様子を、横に座る母がじつと見詰める。

そして、彼女は静かに語りだした。

「最近ね、思うのよ

「ん? 何を?」

「母さんね、今まで我慢に生きてきたなって。

やりたい事やって、言いたい事言つて」

その言葉に、懐かしい気持ちになる。

藤木は昔の生活を思い出した。

家族4人で暮らしていた日々。

裕福ではなかつたけど、

とても楽しくて、誰一人欠ける事無く笑い合っていたあの頃。

特に母は愉快で、自由奔放な人だった。

旅行に行きたいと思えば、

平日でも子供や夫に学校を休ませて家族旅行をしたこともあった。

いつも元気一杯で、表情が人一倍豊かで。

夫婦喧嘩も、大体は母親が優勢だった。

しかし父はそんな母に対して何も言わず、

黙つて、それもこっやかに聞いていた。

そして母を見るその日は、愛情で溢れていた。

そんな姿を思い出し、彼は自分の胸がいっぱいになる事を感じる。

「本当、その通りだね」

彼は苦笑交じりで答えた。

「でもね、一つだけ、今でもああすれば良かったって、後悔している事があるの」

「母さんが？意外だね」

「そうじょ？ねえ、何だと呟う？」

考へてはみたが、思い当たる節は無かった。

「うーん、分かんないや。何？」

少しの間の後、彼女は恥ずかしそうに言つた。

「・・・お父さん、戀してゐて、言わなかつたこと」

「え？」

思ひぬ料で、彼は目を丸くした。

彼女は懐かしそうに目を細めていた。

まるで、遠い何かを見詰めるかの如く。

「私達、お見合いで出会ったの。

お父さんは当時助教授で、私は女学校を出たばかり。
出会った時にね、直感でこう思つたのよ。

『ああ、この人と結婚すれば幸せになれる』て

彼女は照れくさそうに笑う。

「へえ。すごいね。実際その通りになつたじゃない

「ええ。本当、その通りだつたわ。

その数カ月後に私達は結婚したのだけど、

お父さん、結婚を申し出る時、何ていつたと思ひ?

「え? 何か言ったの?」

普通、見合いは結婚を前提とする。

自分のような例外もあったが。

わざわざ申し出る必要はないなどない。

「ええ。 いつも言ったの」

一呼吸付いて、彼女は続けた。

「『愛しています』で」

真っ赤になる彼女の顔は、まるで少女のそのように見えた。

「お母さん、武家育ちだから、言わた時は恥ずかしくて、恥ずかしくて。

その場に倒れるかと思つたわ。

でも同時に嬉しくて。

結婚してからも、お父さんはじめましてお会いてくれたの。

その・・・言葉を

意外な事実だった。

物静かそつな父が、母にやれり言っていたなんて。

「やの度にお母さんは真っ赤になるだけで、何も言えなかつたわ。

時々は悪態もつこてしまつたり。

でもね、こつかは言おうと思つていて、私も同じ言葉を

茶碗を持ち上げ、渴いた喉に茶を少しずつ流し込んでいく。

生まれて初めて、母が悲しそうな顔をしたのを田の間たりにした。

「・・・だけじ、言わないまま、お父さんは私を置いて先に逝つてしまつたわ」

彼女は両手に持つていた空っぽの茶碗を見つめていた。

「あつと、お父さんは分かつてこたよ。

お母さんもやう思つてゐる」とべりー

彼は確信を持つて言った。

「ええ。 そうかもね。 でも・・・」

茶碗を藤木は無言のまま、眺めていた。

「後悔だけはしては駄目。

特に大切な人がいるのであれば尚更よ」

ずしり、と心が重くなつた。

終わらせる。

そう、決めた筈なのに。

「・・・母さん」

「何?」

「・・・」ひん。何でも無い

教えてなかつた筈なのに。

あの見合の結末は。

やはり母は母だ、そう彼は思った。

彼女は『よつこじょ』と言つて、立ち上がり、自分の茶碗をお盆に載せた。

「もつ一杯、飲む?」

母にいつもの笑顔が戻る。

「うん」

鈴虫の歌声が、秋の夜長を誘い込もうとしていた。

彼は目を閉じ、その歌声に耳を済ませた。

次第に、その声は小さくなつていいく。

空の端から浮遊する黒い雲が、月の前を横切るのが見えた。

「また一雨振るのかな・・・」

夜空を見上げ、彼は一人呟いた。

「お嬢様」

外は再び、たくさんの雨が降っていた。

少し濡れた肩を軽くぬぐい、タマは幸花の部屋の前に来ていた。

「お嬢様、お話があります」

ドアを軽く叩く。

返事は無い。

もう一度叩く。

今度は、もつと強く。

しかし、また返事は無い。

「お嬢様？」

タマがドアを開けた。

部屋は真っ暗であった。

タマはベッドの側に近寄る。

しかし、そこに彼女の姿は無い。

「・・・幸花お嬢様？どこに行かれ・・・」

ふ、と田の端に紙片が落ちる。

机の上に、一枚の紙が置かれていた。

彼女はそれを手に取った。

「・・・さ、幸花お嬢様！？」

タマの呟き声が、屋敷中に響き渡つた。

「今日は夜の来客がある」と

持つていた湯飲み茶碗をちやぶ台の上に置くと、

どん、どん。

扉を叩く音がした。

彼女はそつ然と歩きながら、玄関の方へ歩いた。

そこには、いつも洋装の牧が、和服姿で立っていた。

急ぎのよつだ、彼女はそつ思つた。

「あら、牧先生。どうされましたか？こんな時間に

「壮介君は？」

傘をさす牧の額には、つづりと汗が浮かんでいた。

「それが、何時の間にか見当たらぬのですよ。

わつきまでいたのですが・・・」

牧が困惑したよつな表情をした。

「実は先ほど、

先日、壮介君が見合いをした相手の山内殿から電話がありまして。

幸花お嬢様が行方不明だそうなのです。

そこで壮介君なら何か知ってるかと・・・

彼女はしばらく黙った後、こう続けた。

「牧先生。壮介が現れるまで、

ここでお待ちになられたらいかがですか？」

「・・・え？」

彼女は笑った。

「大丈夫ですよ。幸花お嬢様も、きっと直ぐに見つかりますよ。

や、お上がりください。濡れてしまいりますよ」

再度の雨が、強く強く、降っていた。

彼女は微笑みながら、乾き始めていた大きめの手拭を、彼に手渡し

た。

最終話・また、必ず。

氣まぐれに降り続く雨。

暗闇に続く、永い、永い、道のり。

全速力で、その上を駆ける。

分からぬ。

どこのへ向かっているのかも。

でも、それで良い。

この道が知つている。

進むべき場所を。

何も見えない。

何も感じない。

ただ、聞こえてくる。

雨が、道を、自分を、

叩き付ける音が、

何を躊躇つていたのだろう。

何に怯えていたのだろう。

自明だったはず。

本当の望みが何であつたかを。

偽りはもう、要らない。

ふと、今まで聞こえていた音とは違つたがした。

雨の音ではない。

その音は、何かと似ていて、非なるもの。

耳を清ませてみた。

聞こえる。

確かに聞こえる。

雨音に混じる、その音が。

暗闇に慣れ始めた瞳が、その正体を伝えた。

その瞬間、

全てが、止まつた。

雨の音も、時間の流れさえも。

そして、また動き出す。

時が、暗闇に浮かぶ、その確かな存在に、

命を『えたかのよつ』

気まぐれな雨が、

大きな音で、その場を包み込んでいた。

卷之三

枕元に置かれた携帯電話の音が、部屋中に響き渡った。

そもそも、と布団から伸びてきた右手が、その音源の所在を探る。

そして、バン！と大きな音と共に、その電子音を止めた。

「・・・もう朝か・・・」

彼女は欠伸と共に、壁に掛けられた時計を見た。

そして思い切り伸びをしてから、先ほど叩いた携帯電話の無事を確認する。

ふと、彼女は枕に少し大きめのしみが出来ているのに気がついた。

不思議に思つて、自分の顔を触つてみる。

その原因は、直ぐに分かつた。

「・・・泣いてたんだ・・・」

両方の頬が、濡れていた。

そういえば、と先ほどまでの夢の断片を搔き集めてみる。

あまりよく覚えてはいないが、

多分、恋人同士の夢だつた氣がする。

楽しかつた。

だけど、何だかとつても切なくて、苦しくて。

最後、どうなったんだっけ？

良く思い出せない。

二人は・・・あの後、

出逢えたんだっけ？それで、確か・・・。

そこで終わってしまった。

そうえいば、よく出てきた男の人、どんな顔してたっけ。

頼りない感じだけど、優しくて。

背が高くて、眼鏡をしていて、髪が・・・。

「おはよ。もう起きてるかい？朝だよ

ドアのノック音と同時に、父の声がした。

「おはよっ、お父さん」

父がドアを開けた。

「意外だね。もう起きてたの」

父が目を丸くした。

「まあね。久々の大学だし。私もやる時はやるのよ」

「はいはい。そんな事言つてないで、早く着替えなさい。

駅まで送つてあげるから」

父が部屋を出よつとした。

「あ、お父さん・・・」

「ん?何?」

彼女はしばらく、父を見つめた。

「ううん。何でもない」

「やうが、早くしなさい

父はそつまつと、階下へ向かった。

口から微笑がこぼれる。

彼女は急いでパジャマを脱いで、服に着替え始めた。

二つの間に用意してくれていたのだろう、

「ナニ? え? ま、今日は雨が降るらしいから、傘も持つてこきなさい」

「うん」

「そりゃ、忘れ物は無いか?」

「部活があるから、遅くなると困る」

「今日は何時? 帰つてへる?」

父の秘書が、後部座席のドアを開けてくれた。

車は駅のロータリーの所に止った。

父の手から、折り畳み傘を受け取る。

「は～い。それじゃあ、行つてきますー。」

「行つてらっしゃいませ、お嬢様」

「あつがとつ。行つてきますー。」

ドアの傍に立つ秘書にも挨拶をして、

彼女は勢い良く外に出た。

春の暖かさが、ふわりと薫る。

それだけで、幸せな気分になれる。

彼女は早足にホームまでの道を歩いた。

卒業要件たる必修単位、所属『ゼニア』の発表があるからだった。

今日学校開始初日に登校した最大の理由。

法学部の学生である彼女も、そこ最後尾に向かう。

そこは法学部専用の掲示板の周辺だった。

校門を入ると、たくさんの人ばかりが出来ていた。

彼女の大学では、3年生から演習科目が始まる。

それが所謂『ゼミ』と呼ばれているものだった。

『ゼミ』の意義は大きい。

『ゼミ』は卒業までの2年間、入っていなければならない。

そしてその単位が取れなければ卒業は出来ない。

更に、単位が取れるのも、担当教官や授業内容に大きく左右される。

ディスカッション、プレゼンテーション、レポート提出・・・。

どのゼミでも、多くの課題が課される。

だから、2年間続けていける科目を選ばないといけない。

ここは、近年の大学批判というものを受けたか、

他の日本の大学とは違つて、

入るのも難しければ、

出るのも難しい、という学生にとっては嬉しいなーシステムになつてきていた。

だから、その選択は慎重でなければならぬ。

そして人気のゼミはいつも抽選で行われる。

今日も、これから約2年間を決める、云わば『運命の日』だった。

「おはようございます」

見慣れた顔が、そこにほあつた。

「あ、おはよう珠美。もうゼミ、見た?」

珠美、と呼ばれた彼女は、首を横に振つた。

「こんな人だからでは見えないです。

ところで、法学部つてこんなに人がいたなんて、今更知りました」

彼女は、自らが所属している美術部の仲間でもあった。

同じ年なのに、何故か敬語を使ってくるちょっと変わった人だった。

だけど、大学では、彼女と一番仲が良い。

何故かいつも彼女のことを見配してくれて、そしてよく理解してくれて。

本人曰く、『分からないが、心配になつてくる』とのこと。

時々小言も言つてきて、うざつたく思うこともあつたが。

それでも一緒にいると、何故か落ち着く人だった。

「そうだね。こんなにいたんだね」

「ナリハニエバ、ドリのゼミを希望されたのでしたっけ？」

珠美が尋ねてきた。

「一応商法ゼミを志望したんだ。就職にも役立つかと思って。

今年かなり人気らしいんだよねえ」

いつか社長である父の会社を継げるようにならうと、そう考えた上で選択
だった。

不安そうな表情が、彼女の顔に浮かぶ。

「そりなんですか？私は憲法ゼミを志望したのですが。

あ、ちょっとお詫びしましたよ。前に行きましょー！」

二人は若干減った人の間をすり抜け、掲示板の前に来た。

「えーと、憲法の所・・・あー私の名前ありました。ありました

珠美が嬉しそうに呟く。

「・・・ハズレだ」

彼女は大きく溜息をついた。

「本当ですか？良ぐ」見になりました？」

「うん。やっぱり載つてないよ、私の名前」

憂鬱な気持ちが一気に押し寄せる。

彼女は一人、人の洪水から逃れるために泳ぎ出た。

急いで珠美もその後を追った。

「法学部事務室に行くの、面倒くさいなあ・・・」

思わず口からひげやさきが出る。

「でも、やせ取らないと卒業できませんよ?」

落ち着かない様子で、珠美が言った。

彼女達は部屋のある棟の入り口に来ていた。

彼女は右手に持つ絵の具を珠美に押し付けた。

「これ、部室に置いてて。これから何かあるやつ、聞こえてくるから」

ゼリの所属が決まらなかつた者の、悲しい定め。

それは、ここからキャンパスの端つこに位置する法学部研究室尋ねて、

定員に余裕のあるゼリ一覧を確認し、

担当教官と、直接交渉しに行かねばならぬこと。

大学入学以来、行つた事もない研究室に、

こんな用事で行くなんて。

「一緒に行きましょうか?」

心配そうな声が聞こえた。

「良じよ、独りで行つてくれる」

再度、大きな溜息を吐き残して、

彼女は研究棟へと急いだ。

長い黒髪が、春の風と共にふわりと踊った。

「生憎、他の商法ゼリも一杯ですね」

機械的な答えが、カウンターの裏から無情にも返ってきた。

「それじゃあ、民法も一杯ですか？」

カタカタ、ヒキーボードの叩く音がする。

「・・・民法も一杯ですね」

両肩がストン、と落ちた。

脱落感と苛立ちが、一気に湧き上がる。

先ほどからのこの事務員の対応に

ムカムカして「こり」と呟いていた。

望んでもいらない答えばかりが跳ね返ってくる。

「それじゃあ、ビニが空ってるんですか？」

ピリピリした緊張感が、声に走った。

「・・・ああ、レレレら辺ですね。ありました。ありました」

事務員がパソコンの画面を彼女のほうに向けた。

『あれ? と書かれたゼミの一覧表。

そこに連なつてこるのは、やっぱり人気の無いゼミばかり。

法哲学、政治学、法制史、経済法、etc。

法学部生なのに、六法すらも出来ないのか・・・。

「六法系でしたら、レレレだけ空いてますよ

希望が心の奥底から湧き出ると共に、その人が指差す所を見た。

しかし、次の瞬間、彼女のしかめ面がスクリーンにつつさう反射する。

「・・・刑法ですか？」

「ええ。刑法のこの先生ならば、未だ大丈夫みたいですよ」

刑法。

聞いただけで身震いする。

昨年、一番成績が悪かつた科目。

大学のセールスポイントにもなっているらしいへ、

この法学部は刑法が良いと云う噂が名らしかった。

特に学会でも有名らしい、

大村教授の刑法の授業は法学部でも一番難しい、とは聞いていたけど。

そこまでとは思っていなかつた。

まさか、期末試験で司法試験の問題を出してくるだなんて。

今まで『優』と『良』しか取つたこと無かつたのに、

あまり勉強しなかつたのもいけなかつたのだけど

唯一の『可』を付けられた科目。

次に履修すれば『不可』は確実。

それもようじによつてゼミだなんて。

卒業出来ないのは大いに困る。

もつこうなつたら、大幅に定員割れしている法哲学にでも・・・と思つた時だつた。

「IJの先生、今日付けて赴任されたばかりの方ですよ。

試しに話だけされたらいかがですか？」

「え、そりなんですか？」

予想外の返答。

「はい。そういうえば先ほど見かけたから、多分研究室にいますよ。

ほら、すぐそこ」

指の差された方を見た。

大村先生でなければ、どうにかなるかもしない。

「・・・ありがとうございます」

彼女は深々と頭を下げる。

やはり返事は無い。

もう一度呴いてみる。

「あの～。すみません・・・」

返事が無い。

トン、トン、ヒドアを叩く。

「あの、失礼します」

もつ少し強く扉を叩いてみる。

・・・やはり返事はなかつた。

『在室』と書かれた札がかかつてゐるのに。

ふう、と彼女は溜息を付いた。

仕方ない、もう少ししたらまた来よう。

未だ、部活で行つ来る月の展示会用の絵も描き終わつていないし。

心配性の珠美も待つてゐるに違ひない。

そう思つて、彼女はその場を後にした。

まっすぐ歩いて、廊下の曲がり角に来た所だった。

「あやー！」

突如目の前が、大きなものに遮られる。

「え？！あ、わわ……」

ドン。

大きな音と共に、バラバラバラ、と何かがたくさん上から落ちてき
た。

それらに覆われながら、その場に彼女は尻餅をついてしまった。

「イタタ……」

「『めんなさい！大丈夫ですか？！』

「……はい……」

彼女は自分に覆い被さつてきたものの中の一つを手にとった。

それは、かなり古びた、1冊の分厚い本だった。

消えかかった表題に、目を凝らしてみる。

書かれていたのは、『刑法』という2文字。

何故だ？

急に懐かしい気持ちに襲われた。

「・・・これ・・・」

どこかで見たのかな。

こんな古い本で勉強するなんて有り得ない。

けど、どこかで・・・。

「あの、怪我とかされていませんか？」

「え？あ、はい、大丈夫です・・・」

彼女は、それを横に置いて、顔をあげた。

目の前で、心配そうな顔をしている青年がいた。

眼鏡をかけた、背の高い人だつた。

「申し訳ありません。」

僕、本をそのまま積み重ねて持つて来てしまつ癖があつて。

やはり大村先生に袋を借りるべきだったな・・・」

彼は済まなそうに、頭を下げた。

そして、その右手で頭を搔きながら、本を集め始めた。

彼女はその子供の様な仕草を見て、思わず吹き出してしまつた。

「え？あ、また僕何かやつちゃいました？」

実は僕、今日初めてここに来たんですが、もつ緊張しちゃって何がなんだか・・・

「ほわほわの髪」と、ちらりと拍車がかかっていく。

それと同時に、今日見た夢の断片が、脳裏を駆け巡る。

「いいえ。そんなことあつませんよ」

彼女も一緒に散らばった本を集めた。

「少しお待ちしましょ」

彼女は彼の返答を待たず、「ことを進める。

「え? あ。本当に済みません。

本をぶつからせておきながら、こんなことまで・・・」

ふと、先ほど覆い被さつてきた本のそれが田に畳まつた。

「・・・あの」

その本を手に取り、表紙を彼の方に向ける。

「はい？」

「・・・」の本、いつ頃の本ですか？」

彼が一瞬考え込むような表情を見せた。

「えーと。確かに随分昔の本ですよ。1920年代ぐらいかな？」

当時の刑法学者の牧先生という方が書かれたものです」

彼女は表紙を見つめた。

「何でも、

その先生の弟子である藤木先生・・・といつ刑法学者がいらっしゃったのですが、

その藤木先生がお亡くなりになられた後、

先生の奥様が寄贈されたそうですよ。

そういえば面白い事に、たくさんの本の中で、

それだけは藤木先生のものではなく、奥様の所有であったとかなかつたとか

「そうですか・・・」

くたびれた表紙を見つめた。

眠っていた何かが目覚め始める。

「刑法の歴史に興味がおありでいらっしゃるんですか?」

彼が珍しそうに聞く。

「ええ。まあ・・・」

彼女の唇に笑いが灯る。

「（）存知ですか？」

「はい？」

「この本、牧先生が藤木先生の奥様に、直接贈ったんですよ」

両腕でその本をぎゅ、と抱いた。

「え？・・・何故ご存知なのですか？」

彼が呆気にとられた顔をした。

彼女はその顔を見て、無性に嬉しい気持ちになつた。

「・・・何ででしょうね。研究室、あっちですよね

彼女は本を抱えながら研究室の方に歩き出した。

「ちよ、ちよっと待つて

彼が慌てて落ちていた残りの本を拾い上げて、後を追つた。

彼はズレ落ちた眼鏡を戻しながら言った。

「わざわざありがとうございます」

二人は研究室の前に着いた。

ドアの前に山積みにされた本を隣に、

その様子を見て、彼女は思つた。

二、政治

いや、アリジヤなやういけない、と。

「先生」

「はい？」

「先生は刑法の准教授でいらっしゃいますよね？」

「ええ。そうですが」

「私は先生のゼミに入るかどうか尋ねに来ていましたが・・・」

「あ、そうだつたんですか」

彼はよれたスーツのポケットから鍵を取り出し、

ドアを開けた。

開いたドアの向こうには、真っ白な壁に、大きな窓が見えた。

「大歓迎ですよ。一緒に刑法を勉強してこまいましょう」

彼が微笑む。

その笑顔に、先程の思いは確信へと変わっていく。

「それでは、名前と学籍番号の方を教えてください」

「」〇四五三一七。小幡幸です。よろしくお願ひします」

胸ポケットに掛けられたペンで、彼が手帳に書き留めていく。

「小幡さん……と。はい、分かりました。後でレジスターしておきます。

あ、僕は林と申します。じひりじよひじくお願ひしますね

林は手帳をポケットに閉めた。

そして、その右手を彼女に差し出した。

彼女も、その手を右手で取る。

握り締めた感触。

初めてじゃない。

どこかで、もう知っている。

この手から伝わる暖かさは。

「あの、先生の御専攻は？」

「共犯論です。

現代の共犯論を確立された藤木先生の理論から現在の学説の考察等

が中心ですが・・・

突然、彼は、少し考えた様子になつた。

しばらく黙つてから、こう続けた。

「さつきから、僕喋りっぱなしですね。

何故でしょう。僕、初対面の方とはあまり喋らないんです。

それなのに何だか、貴女とは初対面の気がしないんですよ

彼が笑う。優しく、暖かく。

「不思議ですね。・・・でも、私も、そんな気がします

彼女も、それにつられて笑つた。

彼が、彼女を映すその瞳を、少し細めた。

まるで、眩しいものを見つめるかのように

彼女は、ふと窓の外を見た。

何時の間にか、外はどしゃ降りの雨だった。

激しく打ち付ける、雨の音。

始まる。

全てが、再び。

そう、雨の音色が、彼らに告げていた。

Fin.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2253d/>

雨音色

2010年11月4日13時33分発行